983
108

春陽堂文庫

1014

王女のドゥシンキス

中山省三郎譯

春陽堂

始

春陽堂文庫

—1014—

王女のドエペス

（外二篇）

ンキシュプ
中山省三郎譯

春陽堂

383
108

帝國圖書館藏書

國立國會
24.11. 4
圖書館

143030

目次

スペェドの女王……一
ピョートル大帝の黒奴……六一
葬儀屋……二九

スペードの女王

スペエドの女王は胸に祕めたる
悪意を示す
『新版かるた占ひ』

1

空の模様のよくない日には
みんながしよつちゆう
あつまつて、
やるもやつたり　五十から
それの二倍の百と賭け、
さんざ勝つたり　けちがへて、
チョークで數を記したり、
空の模様のよくない日には
こんなことして
暮らしてた

或る時のこと、近衛騎兵ナルーモフの家で、みんなが骨牌をやつてゐた。永い多の夜もいつし

か過ぎて、夜食をしたためようとして席に著いた時には朝の四時を廻つてゐた。勝つて、あとまで殘つた者は大いに健啖ぶりを示したが、そのほかの者になると、空になつた皿を前にして、ぼんやりしてゐるばかりであつた。が、そのうちにシャンパンが出ると、話ははずんで、誰もがその仲間入りをした。

「君はどうした、スーリン君、」と主人が訊ねた。

「負けたよ、例の通り。やつぱり、正直にいふと、僕は運が悪いんだな。ミランドル(1)をやりながら、あがつた例しはないし、どんなことがあつても動じないんだけれど、それでゐて、いつも負けるんだからなあ！」

「だつて、君は一度も釣られなかつたぢやないか？　一度も歩(ルテ)を賭けなかつたらう？……君のしつかりしてるのには驚き入るがね。」

「時に、ゲルマンはどうだらう！」と、客の一人が、若い工兵士官を指しながら言つた。

「生れてこの方、骨牌を手にとつたこともなければ、一度として賭けをやつたこともないくせに、五時ちかくまで坐りこんで、われわれの勝負を眺めてるぢやないか。」

「とても勝負が大好きなんで、」とゲルマンがいつた、「ところが、餘分な金が手にはいるのを

あてにして、必要な金を犧牲にするほどの身空ではありませんからね。」

「ゲルマンは獨逸人だよ。だから、ちやつかりしてるのさ、それまでのことさ、」とトムスキイがいつた、「けれども、僕に解(げ)せない人といつたら、それは僕の祖母さんのアンナ・フェエドトヴナ伯爵夫人だ。」

「え、何だつて、」と客たちが叫んだ。

「どうにも合點が行かないんだ、」とトムスキイがつづけた、「どうして祖母さんが金を賭けないんだか。」

「だつて、何も不思議はないぢやないか、」とナルーモフがいつた、「八十にもなるお婆さんが賭けをしないからつて？」

「さては、あの人のことを一寸も知らないんだね？」

「うん、さう、一寸も。」

「おお、それなら聞かしてあげよう。先づ知つておいて貰ひたいのは、祖母さんがね、六十年ほど前に巴里へ行つて大變流行(はやり)つ兒になつたことだよ。みんながla vénus moscovite(2)（莫斯科のヴィナス）にお目にかからうとして、我も我もと後をつけまはしたもんだ。リシュリュー(3)までも言ひ寄つたとか

で、祖母さんの話によると、こつちがあんまり情ないといつて、危ふく、自殺するところだつたさうだ。その時分の婦人はファラオンをやつてゐたんだね。或る時のこと、祖母さんは宮中へ行つて、オルレアン公[3]と口約束で賭けをして、何でも大變な負け方をしたとかだ。祖母さんは、家へ歸ると、顔の美斑をはがし、環骨を外しながら、祖父さんに負けを打ち明けて、支拂方を命じた。亡くなつた祖父さんは、僕の覺えてる限りでは、まるで、祖母さんの執事みたいなものだつたからね。祖父さんは祖母さんを火のやうに畏れてゐたけれど、流石に途方もない負け方を聞かされると、かつとなつて、算盤を持ち出し、僅か半年ばかりがうちに、五十萬も擦つてしまつたとか、巴里の在には、モスクワ近郊やサラトフ縣にある持村みたいなものがある譯でなしとかいつて、支拂方をきつぱりと撥ねつけてしまつた。すると、祖母さんは横つ面を張りとばして、御機嫌斜のしるしに、たつた一人で寢てしまつた。次の日になると、いくら何でも內輪同志の罰が效いただらうと思つて、良人を呼びつけたものだ。ところが、相手は落ちつき拂つてるぢやないか。仕方がないから、生まれて初めて、良人に理窟を並べたり云ひ譯をしたりした。大いにへり下つて、借金といふもののうちにも、いろいろ種類があるもんだとか、公爵と馬車屋とでは開きがあるとか說明しながら、納得させようとかかつたのだ。ところが、どうしてどうして！　祖父

さんはつむじを曲げてしまつたのさ。駄目だと來たら、もう駄目なんだ！　祖母さんはすつかり進退きはまつた。時に、祖母さんはかなりに有名な人と、眤懇の間柄になつてゐた。君たちは、いろいろと不思議な噂を立てられてゐるサン・ジェルマン[5]伯の話を聞いてるでせう。知つての通り、あの人は永遠の猶太人を氣どつて、不老不死の藥だの、仙丹だの何だのの發明者だなんて自稱してゐるんだ。世間では山師だといつて嘲笑つてゐたが、カザノヴァは例の『回顧錄』のなかで、あれを間諜だつたと書いてゐるんだ。それはさうと、サン・ジェルマンは、不可思議千萬な境遇にありながらも、見かけは實に立派で、社交界に出ても、まことに人なつこい人間だつた。祖母さんは今日に至るまで、無性にあれを好いてゐて、若しもあの男のことをいい加減に言ひ出さうものなら、ひどく怒るんだよ。祖母さんはサン・ジェルマンが大金を自由に出來るのをよく知つてゐた。乃で、あれに泣きつかうと決心して、『時を移さずおいでを願ひたい』と手紙をやつたものだ。直ぐに奇妙な老人はやつて來たが、見ると、祖母さんはすつかり悲嘆に暮れてゐるんだ。祖母さんは口を極めて良人の薄情なことを話して、結局『あなたの友情と好意に頼るより他はない』と言つた。サン・ジェルマンは考へ込んだ擧句、『お望みのお金は御用だてしてもよろしい。』といつた。『しかしそれをきれいさつぱり御返濟になるまでは、お氣が休まるまいと思

ひます。何しろ、そのために又、新しい氣苦勞をさせるのには忍びませんからね。尤も、別の方法がありますよ。あなたは負けを取り返しなすつたがよろしい。』といはれて、祖母さんは答へた、『けど、伯爵樣、わたし共のところには、一寸のお金もないと申し上げましたではございませんか。』『なあに、金なんか要りませんよ。』とサン・ジェルマンが言葉を返した、『まあ、私の申すことをお聽き下さい。』そこで彼は祕傳を彼女に打ち明けた。この祕傳のためにならばわれわれは誰しも、大金を投げ出すだらうがね……」

若い賭博者たちは一そう聽き耳を立てた。トムスキイはパイプに火をつけて一ぷく吸つてからあとをつづけた、「その晩、祖母さんはヴェルサイユの eu jeu de la reine 王妃の骨牌會 にあらはれた。オルレアン公が元締になつた。祖母さんは借りを拂つてゐないことを、あつさりと詫びて、申しわけに、一寸した話をしてから、彼を相手にして勝負にかかつた。彼女は三枚の札を選んで、順々にそれを賭けて行つた。三枚とも全勝になつて、祖母さんは負けをすつかり取り戻した。」

「それは偶然といふものよー」と一人の客がいつた。

「作り話だ！」とゲルマンが口を出した。

「多分、骨牌にからくりがあつたんだらうー」と三人目の男があとを引き取つた。

「僕はさうは思はん」と、トムスキイが大眞面目に答へた。

「でも、どうしてなんだい！」とナルーモフがいつた、「君は三枚も續けて運の好い札を引きあてる祖母さんがついてるのに、今もつてその祕傳を習はないなんて？」

「いや、なかなか間屋がね」と、トムスキイが答へた、「祖母さんには、息子が四人あつて、僕の親父もその一人なんだがね。四人が四人とも賭けるとなると、向う見ずな連中だつた。それなのに、祖母さんと來たら、そのうちの一人にさへも祕傳を授けなかつた。若しも授かつてゐたら、連中は無論のこと、僕にしたつて惡からう筈はなかつたのに、しかし、これは伯父のイワン・イリイチ伯が僕に話してくれたことで、名譽に賭けて本當の話だといつてたんだがね。亡くなつたチャプリツキイ、例の何百萬と云ふ金を擦つてしまつて、零落して死んで行つたあれさ。あれが若い時分に、三十萬ちかくも、何でもゾリツチにだつたな、まんまとせしめられたことがある。奴は捨鉢になつた。ところが、若い連中のいたづらには、いつもやかましかつた祖母さんが、どういふ譯か、チャプリツキイを氣の毒がつたのだ。もう二度と今後は骨牌をやらないつていふ堅い約束をさせてね。チャプリツキイはさつそく、勝つた相手のところへ出かけて行つて、又もや骨牌を初めた。チャプリツキイは最初の札に五萬と賭けて、初めから勝ちつづけた。それ

から更に二倍に賭けて、また勝つた。忽ちにして、借りの分は全部かへすことが出來て、そのうへ更に儲けた……」

「それにしても、もうやすむ時刻だよ。六時に十五分まへだ。」

たしかに、夜が明け放れてゐた。青年たちは杯を乾して、それぞれ家へ引きあげた。

2

「どうやら、あなた方は、腰元のはうをいやにお好きなやうですね？」

「まあ、奥様、仕方がないぢやありませんか。あの人たちの方が、ずつとみづみづしうございますもの。」

「上つ方の會話」

年老いた伯爵夫人は化粧の間の鏡のまへに坐つてゐた。三人の小間使が彼女をとりまいてゐた。一人は臙脂の壺を、一人は留針の小函を、もう一人は燃えるやうに鮮かな色のリボンのついた背の高い帽子を捧げてゐた。伯爵夫人は、遠い昔に色あせた器量をいまさらつくろはうなどとはしなかつたが、ただ若い頃の凡ゆる慣はしを棄てずに、注意ぶかく七十年代の流行にしたがつて、六十年の昔と同じやうに、永いことかかつて、丹念に身なりをととのへるのであつた。小窓

のわきには、この家の養女になつてゐる少女が、刺繍の架にむかつてゐた。

「お早うございます、grand' maman（グラン・ママン）祖母さま」と、部屋に入つて來た青年士官がいつた。

「Bon jour, mademoiselle Lise（ボン・ジュル・マドモアゼル・リーズ）お早う、リーザさん、grand' maman祖母さま、お願ひがあつて參りました。」

「何なの、ボール？」

「實は友だちをひとり御紹介して、金曜日の舞踏會に連れて來るのをお許し願ひたいのですが。」

「それなら、ぢかに舞踏會へお連れ申して、そのとき紹介しておくれ。ゆうべ、お前はNさんのお宅にゐたでせう？」

「無論、さうですよ。とても愉快でした。五時までも踊りましてね。エレッカヤさんのきれいだつたこと！」

「まあ、お前！　どこにいいところがあるの？　あの人の祖母さんの公爵夫人ダーリヤ・ペトロヴナとは、比べものにならないぢやないの？……時に、どうなの、公爵夫人はもうだいぶお年を召しなすつたかしら？」

「え、お年をですつて？」と、トムスキイはうつかり答へた、「あのお方はお亡くなりになつてから、七年ほどになりますよ。」

少女は首をあげて、青年に目くばせをした。彼は、この年老いた伯爵夫人に、同年配の人々の死をみんなが隠してゐることを思ひ起こして、唇を嚙んだ。しかも、伯爵夫人は彼女にとつて耳新しい消息を聞かされても、別に氣にとめなかつた。

「お亡くなりになつたつて！」と彼女はいつた、「一寸も知らなかつた！　御一緒に女官に任せられ、お目見えに參つた折に、女皇さまには……」

といつて、伯爵夫人は孫にむかつて、百度目の昔話を聞かせた。

「さあ、ボール、」と、やがて言つた、「私を起こしておくれ。リーザニカ、わたしの莫入れはどこ？」

夫人は三人の侍女をつれて、化粧を濟ませるために、衝立のかげへ行つた。トムスキイは少女と二人きりになつた。

「どなたをお引き合せするおつもり？」とリザエータ・イワーノヴナが聲低く訊ねた。

「ナルーモフ。知つてるかしら？」

「いいえ。そのひと、軍人、それとも文官ですの？」

「軍人です。」

「工兵ですの？」

「いいえ！　騎兵です。でも、なぜ工兵だと思つたの？」

少女は笑ひ出して、一ことも答へなかつた。

「ボール！」と、夫人が衝立のかげから聲をかけた、「何か新しい小説を屆けておくれ。でも、どうぞですから、この頃のものではないのを。」

「と申しますと、grand' maman（グラン・ママン）祖母（さま）？」

「つまりね、父親や母親を踏みつけにする人間がゐないやうな、そして、溺死人なんかの出て來ない小説のこと。私は溺死人がとても怖（こは）いので。」

「さういふ小説は今はありませんよ。では、露西亞のではいかが？」

「まあ、露西亞の小説なんてあるの？……それなら、お前、それを屆けておくれ、ほんたうに屆けておくれ。」

「御免なさい、grand' maman（グラン・ママン）祖母（さま）。私は急ぎますから……御免なさい、リザヱータ・イワーノヴナ！　どうしてあなたは、ナルーモフを工兵だなんて思つたんでせう？」

やがて、トムスキイは化粧の間を出て行つた。

あとにはリザヱータがただ一人になつた。彼女は仕事をさし置いて、窓の外を眺め出した。間もなく、往來の向う側の角の家から若い士官があらはれた。それを見て、彼女の頰は赧くなつた。また仕事にかかつて、刺繍の布地のうへに顏をうつむけた。

このとき、すつかり支度をした伯爵夫人が入つて來た。

「リーザニカや、馬車の用意をさせて」と、彼女はいつた、「散歩に行くんだよ。」

リーザニカは刺繍の架から立ちあがつて、仕事を片づけ始めた。

「まあ、どうしたの、おまへ！　ぼんやりしてるつたら？」と夫人は喚き立てた、「馬車の用意をするやうにつて、早くいひつけて。」

「唯今！」と少女は靜かに答へて、玄關の間へ走つて行つた。

召使が入つて來て、公爵パーヴェル・アレクサンドロヰッチから屆けられた本を、夫人に渡した。

「まあ、よかつた！　ありがたうといつて。」と夫人がいつた、「リーザニカや、リーザニカ、おまへ、どこへ驅けてくの、そんなに？」

「着更へをしようと思つて？」

「まあ、大丈夫よ、まだ間があるから。ここへお坐り。初めの一册をあけて、大きな聲で讀んでおくれ。」

少女は本をとつて、五六行讀んで聞かせた。

「もつと大きな聲で、」と夫人はいつた、「どうしたの、おまへ？　聲が出なくなつたのかえ？……お待ち、……椅子をこちらへ寄せて、もつと近く……さあ！」

リザエータはなほ二行ほど讀んだ。夫人は欠伸をした。

「もうその本はお止し、」と彼女はいつた、「何て莫迦げたことだらう！　バーヴェル公に返しておやり。大きにといつて。……まあ、馬車はどうしたのかしら？」

「御用意が出來て居りますよ。」往來の方をちらと見て、リザエータがいつた、「いつもおまへには待たされるのね。全く、やり切れないわ。」

リーザは自分の部屋に駈け込んだ。二分とも經たないうちに、夫人は力のあらん限り呼鈴を鳴らした。一方の戸口には三人の侍女が、もう一方には侍僕が駈けつけて來た。

「お前たちは、いくら呼んでも聞こえないんだね。」と夫人は連中にいつた、「リザエータ・イワーノヴナに言つておくれ、私が待つてゐるつて。」

リザエータは外套を着、帽子をかぶつて出て來た。

「たうとう來たのね。」と夫人はいつた、「まあ、大へんなおめかしだこと。どうしてなの、そんなに？……誰を喜ばせるの？　お天氣はどんな鹽梅？　風があるらしいね。」

「一寸もございません、奥樣！　大へん靜かでございますよ。」と從僕が答へた。

「お前さんたちは、いつもいい加減なことをいつて！　風窓をあげてごらん。そうら、ほんとに風があるのに！　それに、寒いことつたら！　馬をはづしておしまひ！　リーザニカ、行くのは止しませう、おめかしが無駄になるけれど。」

「ああ、何ていふ暮らしかしら！」とリザエータ・イワーノヴナは考へた。

まことに、リザエータは不幸な人間であつた。『緣なき麵麭は苦し、』とダンテはいつてゐる、『緣なき人の家の階梯を登るは、いとも辛し。』この名流の老夫人の許に養はれた哀れな娘を措いて、他人に厄介になる苦しさを、誰に知ることができるであらう？　もとより、伯爵夫人は惡氣があつたわけではないが、上流の社會に甘やかされて來た女性の例に洩れず、氣ままで華やかな時を愉しく暮らして來て、今の世に緣のなくなつたあらゆる老人たちと同樣に、物惜しみをして、冷やかな利己主義に泥んでゐた。彼女は上流社會の空さわぎには、常にかはりをもつて、舞

踏會にも出入してゐたが、臙脂をつけ、古風な衣裳をまとつた彼女は、舞踏の間になくてはならない畸形な飾り物といつた恰好で、いつも片隅に腰をおろしてゐた。すると、やつて來る客たちは、おきまりの禮式ででもあるかのやうに、彼女のそばへ近づいて來て、丁寧に、お辭儀をし、そのあとでは誰ひとりして、もはや見向きもしなかつた。夫人は嚴格な禮儀作法を重んじて、誰が誰やら顏も見わけぬままに、町ぢゆうの人々を自宅に招いてゐた。夥しい召使たちは、控への間や女中部屋で、肥えふとり、寄る年波もわきまへずに、餘命いくばくもない老媼の品物をわれ勝ちにと掠めとりながら、好き勝手なことをしてゐた。リザエータ・イワーノヴナは、この家の受難者であつた。彼女は、お茶をついでやつては、砂糖をむやみに費ふといつて咎められた。また小說を讀んでやつては、その作者のあらゆる失策を、一人で着てゐた。散步のときに、お伴をしては、天候や鋪裝道路のことまで責任をもたされた。給料がきまつてゐても、貰つた例しがなく、みんなと同じやうに、つまり極めて寥々たる女たちのやうに、相當の身なりをしてゐなければならなかつた。社交界に出ては、極めてみじめな役割をつとめてゐた。誰もが彼女を知つてゐながら、誰も別に氣にとめはしなかつた。舞踏で彼女が踊るのは Vis-a-Vis（ヴィザヴィ）組みの足りない時に限つてゐた。また貴婦人たちは、どこか自分の服裝の工合を直すために、化粧の間に行く必要がある

と、きまつて彼女を連れて行つた。彼女は自尊心をもつて、自分の境遇をはつきりと自覺してゐたので、切なく救ひの手を待ちわびながら、周圍を物色してゐた。然るに、輕薄な功名心に汲々としてゐる青年たちは、リザエータが彼らの周圍にまつはりつく、年頃の、傍若無人な、冷やかな令孃たちよりも、百倍も可愛らしいのに一向眼をくれなかつた。華やかな、しかも退屈な客間をこつそりと抜け出して、壁紙を貼つた衝立や、用簞笥や、鏡臺や、塗りの寢臺が置いてあつて、銅製の燭臺に獸脂蠟燭がほのぐらく點つてゐる自分の佗びしい部屋へ行つて、さめざめと泣いたことも幾たびであつたらう。

或るときのこと、――この物語の初めに書いた晩から二日を經て、いま私がちよつと立ちどまつた場に先だつこと一週間である――或る時、リザエータは窓の下の刺繍の架にむかひながら、ゆくりなく往來を覗いた拍子に、窓の方に眼を注いで、じつと佇んでゐる年若い工兵士官を眼にとめた。

彼女は顏を伏せて、又もや仕事にかかつた。五分間ほどして、また外を覗くと――青年士官は相變らず同じ所に佇つてゐた。通りがかりの士官に秋波を送るやうなことに慣れてゐなかつたので、往來を見ることを止して、今度は頭もあげずに、二時間ちかくも縫ひつづけた。そのうち

に、食事の知らせが來た。そこで初めて立ちあがつて刺繍架の取りかたづけにかかつたが、又もや見るともなしに往來を見ると、士官はやはり佇つてゐる。これは實に奇妙なことに思はれた。食事のあとで、一種の不安の念をいだいて窓のところに近づくと、もはや士官の姿は見えなかつた。——そのまま彼のことは忘れてしまつた……。

やがて二日ばかりして、公爵夫人と一しよに、馬車に乘らうとするとき、又もや彼の姿を認めた。彼は獺の襟に顏をかくして、玄關の際に佇つてゐた。黑い眸が、帽子のかげに光つてゐた。リザヴエータは、なぜとはなしに、ぎよつとして、いひ知れぬ戰きを覺えながら馬車に乘つた。

家に歸つて來ると、又しても小窓のところへ驅けつけた。士官は彼女の方に眼を注いで、元のところに佇つてゐる。彼女は好奇心に苛まれ、生れて初めての感情にふるへながら、その場を退いた。

この時からといふもの、青年の姿が、この家の窓下に、いつも一定の時刻にあらはれぬ日とてはなかつた。二人の間には、そこはかとない交渉が出來て來た。いつもの所で仕事をしてゐても、近づいて來る氣配が感ぜられて、頭をあげて、日ましに一そうよく、しみじみと男を見つめるやうになつた。どうやら青年の方では、見られることを有難がつてゐるらしかつた。二人の眸

が遭ふ度ごとに、男の蒼白い頰がさつと赧らむのを、彼女は若い者につきものの鋭い眼ざしをもつて見てとつた。一週間ほどすると、彼女は男に微笑みかけるやうになつた。

トムスキイ公爵夫人にむかつて、友人を紹介させてくれと賴んだとき、哀れな娘の胸ははげしく動悸をうつた。しかし、ナルーモフが工兵ではなくて、近衞騎兵だと聞かされると、輕薄なドムスキイに、無躾な質問をして祕密をうつかりと洩らしてしまつたことが口惜しかつた。

ゲルマンは、露西亞に歸化した獨逸人の子で、父からそこばくの遺産をうけ繼いでゐた。ゲルマンは、いよいよ獨立不羈を旨として立たなければならないと確く信じてゐたので、利子などには手もつけずに、俸給だけで暮らしを立てて、いささかの移り氣をも自分に許さなかつた。といへ、彼は打ちとけない人間で、野心家でもあつたから、人一倍の儉約を朋輩から笑はれるやうなことは滅多になかつた。烈しい情熱と、燃ゆるがごとき想像力をもつてゐながら鞏固な意力によつて、普通の若い者にあり勝ちな心得ちがひに陷ることもなかつた。例へば、心の中では賭博を好みながら、『餘分な金が手にはいるのをあてにして、必要な金を犧牲にする』（これは彼の言ひ草であるが）やうなことは、境遇が許さないのだと思ひ込んでゐて、一度として骨牌を手にしたことがないのである。そのくせ、夜つぴて骨牌の前に坐り通して、勝負のさまざまな移り變

りを、狂ほしいばかりに胸をわくわくさせて見まもつてゐるのであつた。

三枚の骨牌の話は、彼に想像を逞しうせしめて、一晩ぢゆう腦裡を去らなかつた。

『若しも、』と彼は、その翌くる日、ペテルブルグの街をさまよひながら考へた、『若しも、あの老夫人が、祕傳を授けてくれたら、どうだらう！　つまり、三枚の勝札の名を敎へてくれたら！　さうしてくれたら、どうして運だめしをしないで居られよう？……どうしてもお目にかかつて、お氣に入りになることだ、さもなくば、戀人になる――尤も、それには大ぶん手間がかかる、何しろ相手は八十七になるんだから。事によると、一週間、いや、二日して死んでしまふかも知れたものではない。……ところで、あの話は本當かしら？……眞にうけていいものかしら？……いやいや、節約、中庸、勤勉、これがおれの三枚の勝札だ。これさへ使へば、身上を倍にすることもできる。七倍にもして、安樂と獨立が得られるのだ！』

こんな風に考へながら、いつしかペテルブルグの或る大通りの、古めかしい造りの家の前にさしかかつた。往來は馬車で塞がつてゐた。馬車はあとからあとからと、灯かげの明るい玄關口へと乘りつける。馬車からは、絶えず、若い美人のすんなりした足や、音を立てる乘馬靴、さては縞模樣の沓下や、外交官たちの短靴などが、敷石のうへにさしのべられる。毛皮の外套やマント

などが、威儀を正した門衛の傍をちらちらと過ぎて行く。ゲルマンは立ちどまつた。

「これはどなたのお邸？」と彼は街角にゐる巡警に訊ねた。

「A伯爵夫人の」と相手は答へた。

ゲルマンは身ぶるひした。不思議な骨牌の話が、またもや胸にうかんで來た。彼はこの家の主と、その奇妙な技倆のことを考へながら、家のまはりをうろつき始めた。

夜も更けてから見すぼらしい宿に歸つて來たが、永いこと寢つかれなかつた。やうやく、寢入つたかと思ふと、骨牌の札や、綠いろの卓子や札束や、金貨の山を夢に見た。一枚々々と賭けて、つひには倍賭けにし、心ゆくまで勝つては、金貨をかきあつめて、紙幣をかくしに押し込んでゐた。

翌くる朝、かなりおそく眼が覺めると、幻の富の消え失せたのを思ひおこして溜息をついたが、再び町へ出てぶらついてゐると、又しても伯爵夫人の家の前へ來てゐた。見えわかぬ力が彼を導いて來たかのやうであつた。彼は足をとどめて、じつと窓の方を見あげた。その窓の一つに、何かの本、或ひは針仕事のうへにでもあらう、うつむいてゐる黑髮の頭が見うけられた。ひよいとその頭があがる。ゲルマンはみづみづしい顏と、黑い眼を認めた。

實に、この瞬間が彼の運命を決したのであつた。

3

ねえ、あなた、

あなたはわたしがよう讀み終へぬ中に、

四枚ものおたよりを下さる

「おとづれ」

リザエータ・イワーノヴナがやつと外套と帽子を脱ぐか脱がぬに、早くも伯爵夫人は彼女を迎へによこして、又もや馬車の用意をさせるやうにと言ひつけた。二人は表へ出た。いよいよ乘り込まうとして、二人の從僕が老夫人を扶け、ドアのところへ押し入れたとき、リザエータは、例の工兵士官が車の輪にすれすれに身をつけてゐるのを眼にとめた。男は女の手をつかまへた。彼女が驚きのあまり茫然としてゐるうちに、青年の姿は見えなくなつたが、――彼女の手には一通の手紙が殘されてゐた。彼女は手紙を手袋の中に匿したが、馬車に乘つてゐる間ぢゆう、何ひとつ耳に入らず、眼にもとまらなかつた。夫人は馬車に乘つてゐると『いま會つたのはだあれ？』

とか、『この橋は何ていふの？』とか、『あの看板には何て書いてあるの？』とか絶えず訊ねる癖があつたが、この時ばかりはリザエータが、いい加減に場ちがひな返事ばかりしてゐたので、たうとう夫人を怒らせてしまつた。

「まあ、おまへはどうしたの？　氣でも遠くなつたのかえ、え？　私のいふことが聞こえないの、それとも、呑み込めないの、……やれやれ、私はまだ舌もつれもしてゐないし、氣もたしかなんだわ！」

リザエータはその言葉をも聞いてはゐなかつた。家に歸つて來ると、彼女は大いそぎに自分の部屋へ駈け込んで、手袋から手紙を抽き出した。手紙には封がしてなかつた。リザエータは早速それを一讀した。手紙の內容は戀の告白であつた。いとも優しく、禮儀を保つて、一字一句すべて獨逸の小說からとつたものであつた。しかし、リザエータは、獨逸語を知らなかつたので、たゞ無暗に喜んでゐた。

それにしても、彼女が受け取つた手紙は、甚だしい不安を感じさせた。彼女は生れて初めて若い男と人目を忍ぶ深い仲になつたのである。男の大膽さに女は畏れをなした。自分の愼しみのない行ひを責めては見たものの、どうしたらいいのかは分からなかつた。窓際に坐ることをやめて、

執拗に後を追ひかける男の熱の冷めるのを、何食はぬ顏で待つてゐようか？　手紙を突き返してやらうか？　それとも、冷淡に、きつぱりとした返事を書いてやらうか？　といつて、彼女には相談をする相手もなかつたのである。彼女には友達もなければ、師匠もなかつた、リザエータは返事をやらうと決心した。

彼女は小さな文卓（ふづくゑ）にむかつて、ペンをとり、紙をとつて考へ込んだ。幾たびか手紙を書きかけては、それを引き裂いた。言葉づかひが餘りに謙遜すぎたり、情（つれ）なすぎるやうに思はれたからである。つひに彼女は滿足のゆく數行を書くことが出來た。

「かならずや」と彼女は書いた、「あなた樣は淸らかなお志をおもち遊ばし、わざわざこのわたくしを恥かしめようとなすつて、あのやうな輕はずみなことをなすつたのではないとおさつし申し上げます。それに、わたくし共のお交りは、こんな風にして初めてはいけないものでございませう。つきましては、お手紙をここにお返し申し上げ、これからさき、途方もない失禮なことをしたと、お咎めを蒙ることのないやうにとお祈り申上げます。」

翌くる日に、歩いて來るゲルマンの姿を認めると、リザエータは刺繍の架から起ちあがつて廣間に入り、そこの風窓から往來にむかつて手紙を投げた。きつと靑年士官がそれと悟つて、騙け

寄つて來るものと當てにしながら。

すると、案の定、ゲルマンは走り寄つて來て、それを拾ひ上げ、喫茶店へ入つて行つた。封を切つて見ると、中には自分の手紙と、リザエータの返事があつた。彼はそれを豫期してもゐたので、これから先の策略をあれやこれやと思ひめぐらしつつ家に歸つた。

それから三日經つて、流行品の店からの使ひだといふ、はしこさうな眼つきをした小さな女の子がリザエータのところへ手紙を持つて來た。リザエータはお金をとりに來たのだらうと內心ひやひやしながら開封したが、忽ちにゲルマンの筆蹟なのに氣がついた。

「あなた、間違つてるわよ、」と彼女はいつた、「この手紙は私へ宛てたのぢやなくつてよ。」

「いいえ、確かにさうです！」と、氣の強い少女は、惡がしこい微笑みを、別にかくしもせずに答へた、「どうか、お讀みになつて！」

リザエータは書面に眼を通した。ゲルマンはあひびきを求めてゐるのである。

「そんな筈はないことよ、」とリザエータは氣早な要求と、その要求の仕方に呆れながら言つた。

「この手紙は、どうしてもお門ちがひだわ。」

かういつて、手紙をきれぎれに引き裂いてしまつた。

「若し、あなたへのでないのでしたら、なぜお破りなさいましたの？」と少女はいつた、「あたし、頼まれたお方にお返ししなければなりませんのに。」

「どうぞですから」と、リザエータは相手の言ひ草に顏を赧らめて言つた、「もう二度とこんな手紙を持つて來ないで下さいな。あなたをおよこしになるお方に、少しは外聞つてものを知りなさいつて、さう言つて頂戴……」

しかし、ゲルマンはこれ式のことでやめはしなかつた。リザエータは、手を變へ品を變へてよこす手紙を毎日のやうに受け取つた。それは最早、獨逸の小說の飜譯ではなくなつてゐた。ゲルマンは、やむにやまれぬ愛慾に動かされて書いたのであつて、その言葉も自分自身のものであつた。そこには、抑へ切れない慾望と、氣ままな取りとめない想像が述べられてゐた。リザエータも今はそれを送りかへさうなどとは思はなかつた。いつの間にか有頂天になつて返事を書くやうになり、その手紙も時と共に長くなり、やさしい愛情がこもるやうになつた。つひに彼女は次のやうな手紙を窓から投げた。

「今晩はN大使のところに舞踏會がございますの。伯爵夫人もお出かけです。私どもは二時ごろまでそちらに居ります。ですから、二人きりでお目にかかるのには、丁度いい折りでございま

す。奥さまがお出かけになりますれば、召使たちは直ぐにあちこちへ行つてしまひませう。門番だけは玄關口に居殘ります。けれど、それさへも大ていは自分の部屋へ行つてしまひます。十一時半にお出かけ下さいまし。そして、まつすぐに表の段々をお上りなさいまし。若しも玄關の間に誰かが居りましたら、伯爵夫人はお家かとお訊ね下さいますやう。きつと『お留守』と申しませうから、さうなればもう致し方もなく、お歸りになるよりほかございません。けれども、大丈夫誰にもお會ひになりますまい。小間使たちは、みんなと一しよに一つ部屋に居りますし、先づ玄關の間から左へお出かけなさいまし、まつすぐに、まつすぐに、奥樣のお寢間までいらつしやいませ。お寢間の衝立のかげに小さな扉が二つついて居ります。一つは奥樣がいつもお入りにならない居間で、左手からはお廊下へ出られます。お廊下へ出ますと狹い曲りくねつた階段があつて、それをお上りになると私の部屋になります。」

ゲルマンは定めの時刻を待ちわびながら、虎のやうに身ぶるひしてゐた。晩の十時には、早くも伯爵夫人の家の前に佇つてゐた。すさまじい天氣であつた。風は咆え、しつとりした牡丹雪が降つてゐた。街燈の光は仄ぐらく、街には人つ子ひとりゐなかつた。ときをり、やせ馬に橇をひかせた馭者が、行き暮れた客をさがしながら過ぎる位であつた。ゲルマンはフロック一つに身を

つつんで、風も雪も感じずに佇んでゐた。やがて、夫人の馬車が曳き出された。ゲルマンの眼には、貂の外套にくるまつた猫背の老媼を、從僕たちが抱へるやうにして連れ出して來るのが見え、そのあとから、寒さうなマントを着て、髪に切花をさした美女がちらと映つた。扉は音を立てて閉まつた。馬車は脆い雪の中を重々しく動いて行つた。門番があちこちの戸をしめた。窓は薄暗くなる。ゲルマンは人氣のとだえた家のあたりを歩き出した。街燈に近づいて時計を覗くと、十一時を二十分過ぎてゐた。彼は街燈の下に立ちどまつたまま、時計の針に眼をこらして、殘りの何分かの過ぎるのを待ちかねてゐた。かつきり十一時半に、ゲルマンは表の段々を昇つて、灯の光もまばゆい玄關へはいつて行つた。門番の姿は見えなかつた。ゲルマンは階段を馳けあがつて、玄關の門の扉をあけると、そこには一人の下僕が、洋燈の下に古風な、よごれた椅子を並べて睡つてゐた。ゲルマンは輕い、しかも、しつかりした足どりで、下僕のわきを通り拔けた。廣間も客間も眞つ暗であつたが、玄關の間の洋燈の光りが、淡々しく射してゐた。ゲルマンは寢間に入つた。古びた聖像がいつぱいに祀つてある聖龕の前には、黄金の御燈がともつてゐた。花模樣の色も褪せた緞子の安樂椅子や、羽毛のクッションをのせて鍍金も剝げたままの長椅子が、唐草模樣の紙を張つた壁のあたりに、佗しげな調和をなして並んでゐた。壁には (6) M-me Lebrun

が巴里で描いた二枚の肖像畫がかかつてゐた。一枚には淡綠の軍服を着て勳章をつけた年の頃四十ばかりの肥つた赭ら男が描かれ、もう一枚は鈎鼻をして、前髪を縮らせて高く搔きあげ、打粉をつけた頭髪に薔薇の花をさした年の若い美女が寫されてゐた。部屋の四隅には、陶器の牧童の像、音に聞こえた Leroy[7] 製の置時計、小函、ルーレットの道具、羽扇、さては前世紀の末に、モンゴルフィエ[8]の氣球やメスメル[9]の磁力療法と共に發明されたさまざまの婦人の遊び道具が置かれてゐた。ゲルマンは衝立のかげへ進んだ。そのかげには小さな鐵製の寢臺があつて、右手を見ると私室に通ずる扉があり、左手には廊下へ拔ける扉があつた。ゲルマンは左手のをあけて、哀れな娘の部屋に通ずる曲りくねつた階段を眼にとめた、……しかし、彼は踵をめぐらして、眞つ暗な居間の方へ入つた。

時はおもむろに過ぎて行つた。あたりは靜まり返つてゐる。客間では、時計が十二時を打つた。あちこちの部屋の時計も次々に夜半を報じたが、またもやあたりはしんとした。ゲルマンは冷たい煖爐にもたれて、佇んでゐた。彼は落ちつき拂つてゐた。何かしら、危險な、しかも避けえられないことをしようと決心した人のやうに、心臟の鼓動もおだやかなものであつた。時計は朝の一時をうち、續いて二時をうつて、彼はやがて遙かに遠い馬車の輾りを聞きつけた。われ知

らず彼は昂奮をおぼえた。馬車は近づいて來て止まつた。踏臺を下す音が聞こえる。屋敷の中はざわめき立つた。召使たちが走り廻つて、呼び交ふ聲がかまびすしく、屋敷中に灯りがともされた。三人の年老いた女中が寢間にかけ込んで來ると、やがて、これでも生きてゐるのかと思はれるやうな伯爵夫人がはいつて來て、ヴォルテール[10]椅子にどつかと腰をおろした。リザエータが彼のすぐわきを通つて行つた。ゲルマンは狹い階段の段々をせはしげに上つてゆく彼女の跫音を耳にした。彼の胸には、良心の苛責に似たやうなものが感ぜられたが、再びもとの靜けさに返つた。彼はまるで石のやうに感じがなくなつた。

伯爵夫人は鏡の前で、衣裳を脫ぎにかかつた。薔薇の花で飾つた頭巾をぬいで、それから、きれいに刈り込んだ白髮頭にかぶつてゐる打粉をふつた鬘を取りはづした。髮の留針は身のまはりに、雨のやうにばらばらとこぼれる。銀絲で縫つた黃いろい衣裳が、ふくれた足もとにすべり落ちる。ゲルマンはゆくりなくも夫人の化粧の厭やらしい祕密を目擊したのであつた。つひに、夫人は寢衣を着て、ナイト・キャップをかぶつただけになつた。遙かに老齡にふさはしいこの衣裳をつけると、もはや夫人はそんなに凄くもなく、醜くもなかつた。

概して老人はすべてさうであるが、夫人もまた不眠に惱まされてゐた。着更へを濟ませると、

窓のわきのヴォルテール椅子に腰をおろして、老女中たちを退らさせた。燭臺も運び去られた。部屋はまた、ただ一つの御燈に照らされてゐるだけである。夫人は眞黄いろな顔をして、歪めた唇をふるはせ、右に左に體をゆすぶりながら坐つてゐた。どんよりした彼女の眼は、全く心のうつろなことを物語つてゐた。今の彼女の姿を見れば、すさまじく體のゆれるのは、意志によつてではなく、身のうちにかくれてゐるえれきの力によるものとも考へられるであらう。

ふつと、死人のやうなその顔は名狀しがたい相に變つて來た。唇は動かなくなり、眸は生氣づいて來た。夫人の前には、見知らぬ男が立つてゐたのである。

「お靜かに、どうぞ、お靜かに！」と、彼は低い聲で、しかも、はつきりといつた。

「私はあなたに危害を加へるつもりはありません。私はちよつと、お願ひがあつて參りました者です。」

老媼は默々として男を見つめた。何となく、男のいつたことを聞いてゐないらしかつた。ゲルマンは耳が遠いのかと想像し、すぐ耳もとへ屈みこんで、もう一度おなじことを繰り返した。やはり老媼は默つてゐる。

「あなたには、」と、ゲルマンはつづけた、「私の一生涯の幸福を授けることがお出來になる。し

かも、それくらゐのことは、あなたには譯もないことです。あなたが續けざまに三枚の骨牌をお當てになることを私はよくよく承知して居りますよ。」

ゲルマンは言葉を切つた。どうやら、伯爵夫人に、こちらの賴んでゐたことが悟れたかと思はれた。さうして、どう返事してよいかを考へてゐるやうに見うけられた。

「あれは冗談ですよ、」と、つひに彼女はいつた、「ほんたうにあれは冗談でしたよ。」

「いいえ、冗談どころぢやありません。」とゲルマンは憤然と口ごたへした、「あなたが負けを取り返す手を敎へておやりになつたチャップリッキイを思ひ出してみて下さい。」

夫人は明らかにどぎまぎした。彼女の相は、はげしい心の動搖を示した。が、間もなく、もとの無表情にかへつた。

「いかがでせう、」とゲルマンはつづけた、

「私に三枚の勝札を敎へて下さる譯には參りますまいか？」

夫人は默つてゐる。ゲルマンは言葉をついだ。

「誰のために、そんなに祕傳をお守りになるのでせう？　お孫さんたちのためにでせうか？　あの人たちは、そんなことがなくつても裕福で居られる。お金の値打も御存じにならない。無駄づ

かひをする人には三枚の札も效き目はない筈です。親からの遺産を守り通せないやうな人は、たとひどんなに悪魔のやうに骨を折つてみたところで、野たれ死をするのが關の山です。私は浪費をする人間ではありません。私は金の値打を心得てゐます。三枚の札は決して無益になることはありません。では、さあ……」

彼は口を噤んで、身ぶるひしながら夫人の返答を待ちうけた。夫人はそれでも默つてゐる。ゲルマンは跪づいた。

「若しもいつか、」と彼はいつた、「あなたが戀をする氣持を經驗なすつたのなら、またその時の感激をおぼえていらつしやるのなら、そして、たとひ一度でも生れたばかりの坊ちやんの泣き聲に微笑まれたことがあるのなら、いつかあなたの胸が、人間的な何ものかに打たれたことがおありなら、果してさうならば、妻として、戀人として、母親としての氣持、この世でのあらゆる聖なるものにかけて、お願ひをするのです。この願ひをどうか却けないで下さい。祕傳をお授け下さい。あなたにとつては、何でもないことではございませんか……事によると、祕傳をもつてゐるために、怖ろしい罪になるか、永遠の幸福を失ふことになるか、或ひは悪魔との約束を果すことになるか、知れたものではないのですよ……よく考へてごらんなさい。あなたは老年の身で、

もうこれからさき永くは生きて居られないのですよ——私はあなたの罪を私の魂にお引きうけしても宜しい。ですから、ただ祕傳だけは授けて下さい。男一匹の幸福があなたの手の中にあつて、私ばかりではなく、子どもや孫、そのまた子どもまでも、あなたが憶えてゐて下すつたことを有難がつて、あなたを聖母のやうに敬まふことになるのを考へてもみて下さい……」

老媼は一言も返事をしなかつた。

ゲルマンは立ちあがつた。

「老いぼれの鬼婆め！」と彼は齒ぎしりをして言つた、「そんなら否應なしに返事をさして見せる……」

と言ひざま、彼はポケットの中から拳銃をとり出した。

拳銃が見えると、夫人はもう一度、感きはまつた表情をした。彼女は射つのを遮るかのやうに、首をふり兩手をあげた……。やがて、後ろにどつかと倒れて、……もうそのまま動かなかつた。

「子供らしいことはやめなさい、」と、老婆の手をとつてゲルマンはいつた、「もう一度だけお訊ねします。三枚の札を敎へて下さいませんか？　それともお厭や？」

伯爵夫人は答へなかつた。ゲルマンは彼女が死んだのを見てとつた。

4

一八××年五月七日

操もなく信仰もない人でした

「おとづれ」

リザエータ・イワーノヴナはまだ舞踏會の衣裳を着けたまま、深い物おもひに沈んで、自分の部屋に坐つてゐた。屋敷に歸ると『何か御用を』と、不承々々申し入れる睡たげな少女を、『着更へは自分でするから、』といつて引きさがらせ、身ぶるひしつつ部屋に入つたのであるが、心の中では、ゲルマンが來てゐるかも知れないと當てにもし、一方また來てゐないやうにとも望んでゐた。ひと目みて、男のゐないことを知ると、二人のあひびきの邪魔をした運命の神に感謝した。彼女は着更へもせずに坐り込んで、わづかの間に、こんなに深入りするに至つた今までの一切の事情を思ひかへしてみた。初めて小窓のかげから、あの青年を見たときから、まだ三週間とも經つてゐないのに――早くも手紙のやりとりをし、男からは夜ふけのあひびきを承知させられ

てゐるのである！　名前を覺えたのも、ただ單に何通かの手紙の末に書いてあつたからであつた。今まで一度として話をしたことも、聲を聞いたこともなく、噂にさへも聞いたことはないのである、……それも今宵といふ今宵まで。考へてみれば、妙な話である！　その晩トムスキイはいつになく、彼とではなしに他の男にいちやついた年若い公爵令孃ポーリンなにがしに腹を立てて、平靜を裝ひながらも、意趣がへしをしてやらうと考へ、リザエータを招び寄せて、彼女を相手に、いつ果てるとも知れないマズルカを散々に踊つたのであつた。その間ぢゆう、彼はリザエータが工兵士官にうつつを拔かしてゐるとからかひ、女に推測のつかないやうなことまでも知つてゐると斷言した。どうかすると彼の冗談はうまく急所に觸れるので、リザエータは幾たびか自分の祕密が嗅ぎつけられてゐるものと考へた。

「そんなこと、どなたからお聞きになりましたの？」と、笑ひながら彼女は訊ねた。

「あなたの御存じの方のお友達から」と、トムスキイは答へた、「かなり有名な人ですけどね。」

「有名な人つて、どなたですかしら？」

「ゲルマンつていふ人。」

リザエータは何も答へなかつたが、兩手も足も氷のやうに冷たくなつた……

「そのゲルマンつていふのがね」と、トムスキイはつづけた、「それはそれはロマンテイックな人物で、横顔はナポレオン、心はメフィストフェレスといふ男ですよ。僕は、あれの良心には咎めることが少くとも三つあると思ひますよ。あれまあ、何だつてそんなに蒼くなつて！」

「あたし、頭が痛いんですの。……それでゲルマンとかいふ人、あなたに何て仰つしやいましたの？」

「ゲルマンはね、その友達のことを、とてもよく思つてゐないんですよ。おれがあいつの位置にゐたら、まるで別なことをして見せるなんていつて。……ゲルマンの奴、自分自身であんたに思召しがあるからだと思ひますよ。少くとも、自分の友達のおのろけを聞く段になると、なかなか心中おだやかならずなんですからね。」

「だつて、どこで私を見ましたかしら？」

「教會でせうよ、多分。それともお散歩してるところを！　それはまあ、われわれの知つたことぢやありませんがね！　事によつたらあんたの部屋で、あんたが眠つてる時かも知れない。それ式のことはやり兼ねないんで……」

そのとき、三人の貴婦人が近づいて來て、(11)「Oubli ou regret ?（ウブリ・ウ・ルグレ お忘れ、それとも お心殘り）」と、訊ねたので、

リザエータにとつては、たまらないほどの興の乘つて來た折角の話が中斷された。

トムスキイが選んだ婦人は、他ならぬH公爵令孃であつた。彼女は一通りの踊りが濟んでから、も踊り廻り、椅子につかうといふ時にくるりと踵を返したりして、そのうちに首尾よく相手を口説いてしまつた。やがて席にかへつて來たトムスキイは、もはやゲルマンのことも、リザエータのことも考へてはゐなかつた。リザエータは途中で腰を折られた話を、もう一度始めたいと切に願つてゐたが、マズルカも終つて、間もなく老夫人は歸つたのである。

トムスキイの言葉は、マズルカにつきものの饒舌に他ならなかつた。が、その言葉は夢みがちな若い娘の胸に深く浸み込んだ。トムスキイが大略ながら物語つた男の風貌は、彼女が心の中に描いてゐたものと一致した。近來の小説のおかげで、早くも卑俗なものに思はれてゐた人物が、今は彼女を威嚇し、同時に惱殺した。彼女はあらはな手を十字に組んで、今なほ花をさしたままの頭を、はだけた胸の邊りに垂れてじつと坐つてゐた。そこへ不意に扉があいて、ゲルマンが入つて來た。彼女は身ぶるひした……。

「どちらにいらつしやいましたの？」と、彼女は怯え切つて、聲低く訊ねた。

「お年寄の伯爵夫人のお寢間に、」とゲルマンは答へた、「たつた今、それから出て來たばかりで

す。奥様は亡くなられましたよ。」

「まあ……何を仰つしやいますの？」

「どうやら、」とゲルマンはつづけた、「亡くなられたのは、僕のせゐらしいですよ。」

リザエータは彼を見つめたが、心のなかには、偶々、トムスキイの言葉がはつきりと浮んで來た。この人は心に咎めることが、少くとも三つある！　ゲルマンは彼女に添つて、窓框のうへに腰をおろし、一部四什を物語つた。

リザエータは畏怖の念をいだきながら耳を傾けた。して見ると、あの熱情的な手紙も烈しい要求も、大膽に、しつこく後をつけ廻すのも、――これはみな戀ではなかつたのだ！　金――彼の魂が渇望してゐたものは、實にそれなのだ！　男の慾望を滿足させて、男を幸福にしてやれるものは、彼女ではなかつたのだ！　しかも、哀れな養女は見さかひもなく、强盜の手助けをして、自分が恩になつた老人をあやめる人に力を貸したことになる！……

さう考へて、彼女は今となつてはどうにも致し方のない慘めな後悔の念に責められて、しくしく泣き出した。ゲルマンは言葉もなく、女を眺めてゐた。彼もまた斷腸の思ひであつたが、荒々しいその魂をかき騷がせたのは、哀れな娘の涙でもなく、嘆きに沈む彼女の姿の驚くべき美しさ

でもなかつた。彼は亡くなつた老媼を思ひうかべても、良心の苛責は覺えなかつた。ただ一つ、――それによつて富をうることを當てにしてゐた祕傳を、むざむざと永劫につかみそこねたのだと考へて、身の毛もよだつばかりであつた。

「あなたは魔物です！」とリザエータは遂に言ひ放つた。

「死なすつもりはなかつた、」とゲルマンは答へた、「拳銃にも彈丸はこめてなかつたのだし。」

二人は共に口を噤んだ。

朝が近づいた。リザエータは燃え盡きた蠟燭を吹き消した。夜明の白々しい光りが、彼女の部屋を明るくした。彼女は泣きぬれた眼を拭つて、ゲルマンを見あげた。彼はなほ腕を組んでいかつく眉をひそめて、窓框に腰をかけてゐた。その恰好は不思議にもナポレオンの肖像畫を思ひ起こさせた。この類似はリザエータをさへも驚嘆させた。「あなた、この家をどうして出ますの？」

とやがてリザエータが言つた、「他人の知らない階段を通つてお出ししようと思ひましたけど、それにはお寢間を通らなければいけませんし、さうなるとわたし、怖くて。」

「その階段へどうして出るか敎へて下さい――自分で出て行きますから。」

リザエータは立ちあがつて、箪笥から鍵をとり出し、ゲルマンにそれを渡して、道順を詳しく

敎へてやつた。ゲルマンは冷たくなつて、されるがままになつてゐる女の片手を握りしめ、うなだれた額にくちづけして出て行つた。

彼は廻り廻つた階段を下りて、再び伯爵夫人の寢室に入つた。事きれて、硬直した老媼が椅子にかけてゐる。死顏は深い靜寂をあらはしてゐた。ゲルマンは死人の前に立ちどまつて、怖ゐべき眞相を見きはめようとするかのやうに、しみじみと眼をこらした。やがて、つひに居間にはいつて、壁紙にかくされてゐる扉をさがし出し、奇妙な感じに襲はれながら暗い階段を下り始めた。『まぎれもないこの階段を通つて、』と考へてみた、『恐らく六十年の昔には、丁度この刻限に縫箔の上衣をまとつて、王鳥風[12]の髮も美しく、三角帽を胸に抱きしめ、年若い果報者がやはりあの寢間へと忍び込んだものであらう。その男は疾うの昔に墓の土となつたのに、生き永らへた夫人の方は、やつと今日、息の緒がとだえたばかり……』

段の下へ來て、ゲルマンは更に一つの扉を見つけ、同じ鍵で譯もなく扉を開けて、通りぬけの廊下を通つて、往來へ出た。

5

その晩のこと、わしのところへ、今は亡きVなにがし男爵夫人があらはれた。

故人はすつかり白づくめで、かういつた、

「御機嫌よろしう、顧問官さま！」

スエーデンボルグ

宿命の夜から三日を經た朝の九時といふに、ゲルマンはN修道院へと出かけて行つた。そこでは今は亡き伯爵夫人の葬儀が行はれることになつてゐた。後悔の念は覺えなかつたが、それでもなほ『貴樣は老婆殺しだ！』と繰り返す良心の聲を、全く抑へてしまふ譯には行かなかつた。心からの信仰に乏しかつた彼は、幾多の迷信に憑かれてゐた。そこで、これからさき亡くなつた伯爵夫人の祟りが降りかかつて來るに相違ないとかんがへて、その赦しを乞はんがために、この葬式に列なることに決心したのであつた。

教會堂は人で一ぱいであつた。ゲルマンはやつとのことで群がる人々のなかをかきわけて進んだ。天鵞絨の天蓋の下の豪華な棺臺のうへには、柩が置かれてゐた。柩には亡くなつた人がレースの頭巾に、白繻子の衣をつけ、胸に手を組んで、横たはつてゐた。その周圍には一家の者が立つてゐる。下男は黒の上衣(カフタン)を着て、肩には定紋つきの飾紐(リボン)をつけ、手には蠟燭を捧げてゐた。子孫、曾孫など、血につながる人たちは大忌(おほみ)の服をまとつてゐた。

誰ひとり泣く者はなかつた。涙を出したとしても、それは空涙であつたらう。伯爵夫人はあまりの高齢であつたから、急に亡くなつたからとて、人の心をうつものではなく、一族の人たちなどは疾うの昔から亡き數に入れてゐたほどであつた。若い僧正が忍び言を述べた。彼は人の心を動かす平易な言葉をもつて、永年のあひだ基督教徒としての大往生を、靜かに心やさしく念じ暮らした行ひ正しき故人の安らかな最期を述べた。「死の天使は、」と講師はいつた、「敬虔なる瞑想にふけつて、眞夜の花聟を待ちわびてゐた人を探し出された。」

勤行はしめやかな禮をもつて終りを告げた。先づ最初に身寄の人たちが遺骸に訣別した。やがて、永い永い歳月を徒らなる遊び仲間であつた故人に、最後の告別をしようとしてやつて來た夥しい會葬者たちが、列をなして進んだ。そのあとからは召使たちがつづいて行つた。最後には、

故人と同年輩の年老いた奥女中が近づいた。二人の若い娘が支へながら連れて來たのである。老女は地に跪づく力もなく、自分の主人の冷え果てた手に接吻しながら、ただひとり幾しづくか涙をおとした。そのあとからゲルマンはいよいよ柩に近づかうと決心した。彼はひれ伏して、暫くの間は縱の枝をまき散らした冷たい床に身を投げ出したままであつた。やがて起きあがると、亡くなつた夫人にも劣らず眞蒼になつて、棺臺の段を昇つて、身をかがめた……

このとき、彼には死人がふつと片眼をしばたたいて、嘲るやうにこちらを覗いたやうな氣がした。ゲルマンは、そそくさと後ずさりをするはずみに、足を踏みはづして仰向けに床に倒れた。人々はさつそく抱き起こした。丁度これと時を同じうして、リザエータも氣を失つて、教會堂の上り口へ連れ出された。思ひもかけぬこの出來事のために、暫しが間は暗澹たる儀式の莊嚴さがかき亂された。會葬者の間には、ひそひそと囁きかはす聲がおこり、故人の近い親戚にあたる瘦身の侍從職は、わきに立つてゐる英國人に、あの青年士官は夫人の私生兒なのだと耳打ちした。これを聞いた英國人は冷やかに「Oh?(ほほう)」と答へた。

その日いち日、ゲルマンは極度に調子を狂はしてゐた。さびれた旅亭に行つて食事をするうちに、恒例を破つて、大酒をあふつた。それも内心の興奮をおし鎭められるやうな氣がしたからで

ある。ところが、酒を飲むと、一そう想像を逞しうした。家に歸ると、着更へもせずに寢臺に身を投げて、そのままぐつすりと眠り込んだ。

眼がさめた時には既に夜も更けてゐて、月の光が彼の部屋を照らしてゐた。時計を覗くと、三時に十五分まへであつた。眼が冴えて、睡氣が去つてしまつた。彼は寢臺のうへに坐つて、老夫人の葬儀のことを考へてみた。

そのとき。誰かが往來から窓を覗き込んだが、すぐに行つてしまつた。ゲルマンはそれにはさして氣もとめなかつた。一分間ほどすると、今度は玄關の間の扉をあける音が聞こえて來た。ゲルマンは例によつて醉ひしれた從卒が夜遊びをして歸つて來たのだらうと考へた。然るに、彼は聞き馴れない跫音を耳にした。誰かが靜かに上沓を摺らせながら歩いてゐるのだ。扉があいた。入つて來たのは白衣の婦人であつた。ゲルマンは年老いた乳母だとばかり思ひ違へて、――こんな時刻に何用あつて來たのかと不審の念をいだいた。が、白づくめの女は、滑るがごとくに近ついて來て、忽ち眼の前にあらはれた、――見れば、まがふ方なき伯爵夫人である！

「心ならずも來てしまつた、」と、夫人はしつかりした聲でいつた。お前の願ひを叶へてやれとの仰せでしたからね。『三』と『七』と『一』と、その順にやれば勝ちです。但し一晝夜に一枚以

上やらないこと。また一旦勝つた以上は、一生涯やらないといふ條件つきで。それに、家のリザエータと一しよになつてくれるならば、私を殺した罪は帳消しにしてあげませう……」

かういつたかと思ふと、夫人は靜かに踵をめぐらして、扉に近づき、又もや上沓を摺つて姿を消してしまつた。ゲルマンは表口の扉の鳴る音を耳にし、誰かがまた窓の中を覗き込むのを眼にとめた。

ゲルマンは永いこと正氣にかへれなかつた。彼は次の部屋へ出て行つた。彼の從卒は床のうへに眠つてゐた。ゲルマンは無理によび起こした。が、醉ひつぶれてゐる男からは、何の消息も聞き出せなかつた。玄關の扉はすつかり閉まつてゐた。ゲルマンは自室に歸つて、蠟燭をともし、眼にとめた幻のことを書きとめた。

6

「待つた！」

「よくも待つたなどといつたな？」

「閣下、わたくしは、お待つと申したのでございますよ！」

自然界において、二つの物體が同時に同じ場所を占め得ないのと同樣、精神界にあつても、二つの固定した觀念は共存することが出來ないものである。間もなく『三』『七』『一』が、ゲルマンの心に粘りついて、亡くなつた老夫人の面影を破つてしまつた。『三』『七』『一』は常に彼の腦裡を離れず、絶えず彼の口に掛けられた。若い娘を見れば「まあ、すんなりしてゐること！　まるでハートの『三』だ」と云ふ。「何時ですか？」と訊かれては「あと五分で『七』」と答へる。太鼓腹の男は必らず彼に『一』を想ひおこさせた。『三』『七』『一』は夢の中でさへも、ありと凡ゆる形をとつて、彼のあとをつけ廻してゐた。『三』は眼のまへに華麗な花と咲き、

『七』はゴチック風な門となつて現はれた。。更に『一』は大きな蜘蛛となつた。彼の一切の思想は一點に集中された――かくも高價に購つた祕傳を是非とも利用したいと。そこで彼は職を退くことや旅のことを考へるやうになつた。巴里の町の公開の賭場へ行つて、恍然たる運命の神から財寶をせしめてやらうと考へる。ふとした機會がこの氣苦勞を免れさせた。

モスクワに、有名なチェカリンスキイを元締とする裕福な賭博者の倶樂部があつた。この元締は、一生涯を骨牌で暮らし、勝てば高利の手形をとり、負ければ利のつかない現金で拂ふといふやり方をもつて、嘗つては幾百萬の身代をつくり上げた男である。永年の經驗は、仲間の信用を得るに足つて、凡ゆる客に對する款待ぶりや、腕ききの料理番、さては愛想のよい陽氣な物腰などが、世間の尊敬をかち得たものであつた。その男がいまペテルブルグにやつて來たのである。都の青年たちは、骨牌のために舞踏會を忘れ、女を追ひ廻す愉しさをファラオンの誘惑のために顧みず、彼のところへ押し寄せて來た。

ナルーモフもゲルマンを連れて來た。

二人は懇懃な召使の一ぱいゐる豪華な部屋の立ち並ぶ間を通りぬけた。どの部屋も人で一ぱいであつた。幾人かの將軍と樞密顧問官とが、ホイスをやつてゐた。また若い連中は緞子張りの長

椅子に凭れかかつて、アイスクリームをたべたり、パイプを吹かしなどしてゐた。サロンの長卓子のぐるりには、二十人ほどの遊び手が押しあひへし合ひして、中に主人が坐つて親元になつてゐた。彼は年の頃は六十くらゐで、風采は極めてつつましく、頭は銀髪に蔽はれてゐた。丸々として、生氣のある顏は心の善良なことを示し、眼は絶えず微笑みをうかべて、初々しい光りを放つてゐた。ナルーモフは彼にゲルマンを紹介した。

チェカリンスキイはうちとけて手を握り、格式ばつたことは止して下さいといつて、また元締をつづけた。

骨牌を配るのには、かなりに暇がかかつた。卓子のうへには三十枚を越すほどの骨牌が置かれてゐた。チェカリンスキイは一枚を投げ出す度に、勝負をする人たちに札を攤へる餘裕を與へるために、手を休めたり、彼らの負け高を書きつけたり、鄭重に彼らの要求を聽いたり、或ひは一そう鄭重に、うつかりと誰彼が折り曲げた『餘り角』[13]をのしたりした。つひに、一通りくばるのも終つた。チェカリンスキイは骨牌を切つて次のを配る用意にかかつた。

「私にも配つて下さいまし、」とゲルマンはそこに金を賭けてゐた肥つちよの紳士の後ろから手をさし伸べていつた。

チェカリンスキイは微笑みをうかべて、快よく承諾する旨の合圖に、默つてうなづいた。ナルーモフも笑ひながら、ゲルマンが永年に亙る禁を解いたことを祝し、幸先のよからんことを祈つた。

「よし來た！」と、白墨で持札の背に賭け高を記してゲルマンがいつた。

「いかほどでございませうか？」と、元締は眼を細くしながら訊ねた、「御免なさいまし。ようく見えないものですから。」

「四萬七千、」とゲルマンは答へた。

これを聞くと、誰もが一せいに振りかへつて、一同の眼はゲルマンに集注された。

「あれは氣がちがつたんだ」とナルーモフは考へた。

「ちよつと念のために申し上げさしていただきますが、」とチェカリンスキイは相變らずの微笑みをうかべて口を出した。「あなたの遊びはちとひど過ぎますよ。こちらではまだ一度に二百七十五留以上に賭けたお方はございませんのでしてね。」

「なあに、構ふもんですか？」と、ゲルマンは言葉を返した、「それでは、僕の札をお受け下さるかどうか？」

チェカリンスキイは、やはり恭々しく承諾するといふ科をつくつて頭をさげた。

「ただ一言申し上げて置きたいと存じますのは、」と彼は言つた、「仲間の信用は充分に得てゐますが、現金でないと、どうにも元締をいたし兼ねますので。もとより、わたくしといたしましては、お言葉だけでも結構でございますが、何分にも勝負の順序や勘定の都合がございますので、恐縮ですが、札に現金をお載せ願ひたう存じます。」

ゲルマンはポケットから一枚の銀行手形を取り出して、チェカリンスキイに渡した。相手はざつと調べたのち、それをゲルマンの札の上に載せた。

さうして、いよいよ札を配り初めた。右手には『九』、左手には『三』が出た。

「しめた！」とゲルマンは持札を示しながら言つた。

賭けてゐる連中の間に呟く聲がおこつた。チェカリンスキイはふつと顔をしかめたが、すぐにまた例の微笑みをとり戻した。

「お受けとり下さいますか？」と彼はゲルマンに訊ねた。

「どうぞ。」

チェカリンスキイはポケットから數枚の銀行手形をとり出して、直ちに勘定を濟ませた。ゲルマンは金をうけ取ると、卓子を離れた。ナルーモフは呆然として、正氣にかへれなかつた。ゲルマンは檸檬水を一杯飲んで家路についた。

翌くる日の晩、彼はまたチェカリンスキイの許に姿をあらはした。やはり主人が元締をしてゐた。ゲルマンは卓子に近づいた。すると、直ぐに賭け手は彼のために席をゆづつた。チェカリンスキイも愛想よく挨拶した。

ゲルマンは次の勝負まで待つて、札を張り、その上に四萬七千留と、更に昨日の儲けを載せた。チェカリンスキイが札を配り始めた。右手に『小姓』、左手に『七』が出た。

ゲルマンが『七』をあけた。

誰もが感嘆の聲を放つた。さすがのチェカリンスキイも眼に見えて動搖の色をあらはした。彼は九萬四千を數へてゲルマンに渡した。ゲルマンはそれを落ちつき拂つて受けとると、忽ち引きさがつた。

また次の晩、ゲルマンは卓子にあらはれた。一同は彼の來るのを待ちうけてゐた。

將軍や樞密顧問官までが、この滅多にない勝負を見ようとして、ホイストをやめてしまつた。

青年士官たちも、長椅子から跳びあがり、召使といふ召使がまたサロンに集まつて來た。一同が

ゲルマンを取り圍んだ。勝負をしてゐたほかの連中もどんな結果になるのかと氣を揉んで、もはや場を張らなかつた。蒼ざめてゐるうちにも、やはり微笑をたたへてゐるチェカリンスキイと一戰を交へようと身を構へて、ゲルマンは卓子のわきに佇つてゐた。互ひに骨牌の封印を切つた。チェカリンスキイが札を混ぜた。すると、ゲルマンがこれを切つて、自分の札を張り、山と積む銀行手形で蔽つた。それはまるで決鬪の場のやうであつた。息づまるやうな靜寂があたりに漲つた。

チェカリンスキイが札をくばり出した。彼の手先はふるへてゐる。右手には『女王』、左手には『一』が出た。

『一』が勝つたー」とゲルマンはいつて、持札をおこした。

「いや、あなたの『女王』はやられてゐますよ、」とチェカリンスキイが慇懃にいつた。

ゲルマンは愕然とした。事實、彼がめくつたのは『一』ならぬスペエドの『女王』であつた。彼はどうして札の引き違ひをしたのか、察しがつかず、自分の眼を信ずることも出來なかつた。その瞬間、彼にはスペエドの『女王』が眼を細くして、ほくそ笑みを洩らしたかのやうに思はれた。奇しくも似てゐるその面影に彼はぎくりとした。

「婆め！」と彼は恐怖のあまり叫んだ。

チェカリンスキイは儲けた手形を自分の方に引き寄せた。

ゲルマンは身じろぎだもせずに佇つてゐる。

やがて、彼が卓子を離れると、物さわがしい人聲がわきおこつた。

「見事な勝負だつたなあ！」と、遊び手の連中は口々にいつた。チェカリンスキイは又もや元締を動めて、勝負はいつものやうにつづけられた。

結び

ゲルマンは氣がちがつた。今はオブホフ病院の十七號室にゐて、どんなことを訊いても返事をするではなく、非常に早口に「三、七、一！　三、七、一！」と呟くばかりである。

リザエータ・イワーノヴナはまことに氣だてのやさしい青年と結婚した。この男はどこかの役所に勤めて、相當の收入をえてゐるが、實は、嘗て老伯爵夫人の家令をしてゐた男の息子であつた。リザエータはまた、貧しい身内の娘を養つてゐる。

トムスキイは大尉に昇進して、例の公爵令嬢ポーリンを妻に迎へた。

一八三四年

註1　ミランドル　骨牌戯法。

註2　リシュリュー　一六九六——一七八八。佛蘭西の大宰相リシュリューの末孫で、情痴を謳はれた宮廷人。

註3　オルレアン公　一七四七——一七九三。佛蘭西王室の流れを汲む家に生る。好男子で才氣煥發であつたが、放縱に流れ節操を缺いた。彼の邸宅パレ・ロアヤルは革命運動の中心となり、彼は人民側の主領となつて「フイリップ平等」と稱せられた。

註4　環骨　スカートをふくらませるために用ゐた鯨骨製の環。

註5　サン・ジェルマン　錬金術師として、全歐をさまよひ歩いた大山師。

註6　マダム・ルブラン　一七五五——一八四二。有名な佛蘭西の肖像畫家。

註7　ルロア　十八世紀の初にジユール・ルロアによつて創設された佛蘭西の有名な時計工場。

註8　モンゴルフイエ　一七四〇——一七九九。佛蘭西の發明家、飛行家。一八八三年に弟と共に氣球をつくり、水素氣球の基をなし、ルイ十六世から賞金を與へられ、更にナポレオンの援助のもとに落下傘その他のものを發明した。

註9　メスメル　一七三四——一八一五。オーストリアの醫師。天體から人間の神經系に及ぼす影響を磁氣の力によるものとし、磁氣による療法を主張した。後に指壓療法のごときものを考へたが、もとより非科學的なもので、呪術の性質を帶びてゐた。

註10　ヴォルテール椅子　ヴォルテールがよくかけてゐたやうな型の肘掛椅子。

註11　ウブリ・ウ・ルグレ　マズルカの相手をきめる時の合言葉。假りに二人の女の名を、ウフリとルグレにしておいて、男に「どちらか」と訊ねると、男は一方をいはなければならぬ。かくして女の相手が決められた。

註12　王鳥風　十八世紀の全歐洲に流行した結髮の型。

註13　餘り角　賭金を增したしるしに、骨牌の角を折る。角を折つたままのを配るのは、間違ひのもとになるので、特に親元が注意をして直すのである。

ピョートル大帝の黑奴

1

われは巴里にあり、
われは生くることを始めて、いきづくことを始めず。

ドミトリエフ――「旅人雜誌」

ピョートル大帝の命を奉じて、改革後の國家に必要缺くべからざる知識を得るために外國へ派遣された青年たちのうちに、大帝を教父とするイブラヒムといふ黒奴があつた。彼はパリーの士官學校に學んで、砲兵大尉に任ぜられ、スペイン戰爭(1)には殊勳を立てて、重傷を負ふに及んでパリーに歸つて來た。大帝は國務多端のさなかにも、絶えて愛し子の消息をたづねることを怠らずつねに帝の意中を察して、これに阿諛し、彼の進歩と操行とを稱へる聲に接してゐた。ピョートルは殊のほかの御滿足で、一度ならず彼をロシアに歸るやうに促したが、イブラヒムは敢へて腰をあげようとはしなかつた。或ひは負傷、或ひは知識を完全に習得しようとする願望、或ひは手許金の不足など、あれやこれやと辯解につとめてゐた。ピョートルはその懇願を聽きいれて、奥

奥も健康に注意してくれといひ、學業に熱心なのを嘉し給うて、自身の入り目には極めてつつましかつた大帝も、彼のためには費用を惜しむことなく、金に添へて父としての忠言や、ねんごろな教訓を申し送るのが常であつた。

あらゆる史料の傳ふるところによれば、その當時のフランス人の輕佻、狂態、榮華になぞらふべきものは、一つとしてなかつたやうである。宮廷の嚴肅なことや、その莊重、禮節をもつて知られるルイ十四世の御代の終り頃の名殘は、もはや求むべくもなかつたのである。幾多の美點と共に、惡德といふ惡德をもつたオルレアン公は不幸にして僞善といふことの微塵も出來ない人であつた。パレ・ロワイヤル(2)の躁宴はパリーでは知らぬ人のないくらゐであつた。このお手本は病氣のやうに人々の間に傳播してゐた。丁度この時にラー(3)があらはれた。金錢に對する貪婪さは、享樂放恣を渇望する心に結びついて、領地はあとかたもなくなり、德義心は滅び去つた。フランス人は笑ひをうかべながら、錢勘定をし、國家は諷刺的なヴォードヴィルの陽氣な伴奏につれて、崩壞の道を辿つてゐた。

さうかと思ふと、一般の社會は極めて興味の深い光景を示してゐた。教養と、遊びを求める心とが、あらゆる階級の人々を接近させた。富、慇懃、名譽、才能、さては奇怪なことまで——凡

そ好奇心をあふり立てる餌となり、或ひは樂しみになりさうなものは悉く同樣の好意をもつて迎へられた。文學も學術も哲學もその靜かな書齋を見棄てて、上流の社交界にあらはれ、上流人の氣持を巧みに操りながら流行に迎合したものであつた。女たちの時めいた世には相違なかつたが、もはや彼女たちも神のやうに崇められるのを要求しはしなかつた。女たちに對する深い尊敬の念も、うはべだけの鄭重さに代つてしまつたのである。近代のアテネのアルキビアデスともいふべきリシュリュー公のざれ唄は今では歴史的なものとなつてゐるが、よくその頃の風俗についての概念を與へる。

Temps fortuné, marqué par la licence,
Où la folie agitant son grelot,
Qu'un pied léger parcourt toute la France,
Où nul mortel ne daigne être dévot,
Où l'on fait tout excepté pénitence,.....

わがまま勝手でその頃は　愉しかつたよ、

鈴をちやらちやら、足もかろがろ
たはけの風が　フランス中を　吹いてめぐつて、
信心などする御にもならて、
悔いをよそにし、好きなことして……

魅惑的な風貌に高い教養、さては天賦の才能を一身に兼ね備へたイブラヒムの出現は、パリーの老若男女の注目するところとなつた。貴婦人たちは悉く le nègre du czar（ツアーリの黒奴）を自宅に迎へようと望んで、われ先きにと彼をつかまへるのであつた。攝政公が陽氣な夜會に招いたのも、一度や二度のことではなかつた。彼はアルエの若々しさやショリューの翁ぶり、或ひはモンテスキューやフォントネルの會話に生氣を添へられる晩餐の會にも出席した。どこのバレーにも、どこの祝宴にも、どこの芝居の初演にも彼の來なかつた例しはなく、若き日の力、生れながらの熱情を傾けて、世を擧げての嵐に身を任せてゐた、とはいふものの、この遊蕩三昧の愉しい世界を遠ざかつて、何の奇もないベテルブルグ宮廷の生活に歸ることを思ふだけなら、イブラヒムはさほどに身の毛のよだつやうな思ひはしなかつたのである。彼は別の一そう強い絆によつて、パリーに足どめをさせられてゐた。年若きアソリカ人は戀をしてゐたのだ。

D＊＊伯爵夫人は、すでに初花の頃も過ぎた身ではあつたが、今なほ美貌を謳はれてゐた。年十七にして修道院を出ると、愛情を注ぐ暇もないうちに、一人の男の許に嫁いだが、その後の良人は別に愛情がどうのからのと、氣にもかけなかつた。彼女の戀人として噂に上つた者も相當にあつたが、上流社會の騰揚な捉によつて、彼女は首尾よく美名を保つことが出來た。つまりは、彼女が何か可笑しなことをしたとか、迷ひの道に踏み入つたとかいつて、堂々と非難することが出來なかつたからである。彼女の家は極めてモダンなものであつたから、彼女のところはパリーの最もよい社交場となつた。イブラヒムはルヴィルといつて、最近の彼女の戀人と見做され、自分でもさまざまな方法によつて、そのことをあらゆる人々に感づかせようと勉めてゐる青年によつて彼女に紹介された。

伯爵夫人は慇懃にイブラヒムを迎へたが、何も特別な注意を拂つてはゐなかつた。この一事は彼を嬉しがらせた。日頃、人々は若い黒奴を、まるで奇蹟のやうに扱ひ、彼を取りまいてはお世辭や妙な質問を浴びせてゐたからである。この好奇心は、表面はいかにも親切げな風を裝つてゐたが、いたく彼の自尊心をいためつけてゐた。女たちの注ぐやさしい眸は、成程われわれの努力の殆んど唯一の的には相違ないが、それすらも彼を喜ばせず、あまつさへ悲痛と憤懣の念にさへ

充たさせるのであつた。彼は自分が他の人たちから、何かの珍らしい獸、偶々この世に齎らされた緣もゆかりもない特殊な生物にも類するものに見られてゐるのを感じた。彼は誰にも氣をとめられずにゐる人々を羨み、彼らのとるにも足らない境涯を幸福なものと見做しさへもした。

自分は生れながらにして愛をうくべき身ではなかつたとの考へが、己惚れや氣取りを控へさせてゐたが、それが却つて婦人に對する彼の態度に並々ならぬ魅力を與へた。彼の言葉は直截で莊重であつた。彼は、フランス人の機智の大仰な洒落や、辛辣なあてこすりにうんざりしてゐるD＊＊伯爵夫人に好かれた。屢々イブラヒムは彼女の許を訪れた。かくするうちに、夫人はいよいよ若き黑奴の風貌にも慣れて、客間に見える打粉をふつた鬘の間に、黑々と際立つ縮毛の頭に、快よい何ものかを見いだすやうにさへもなつた（イブラヒムは頭に傷ついてゐたので、鬘をつけずに繃帶をまとつてゐた）。彼は二十七であつた。身の丈は高く、すんなりとしてゐた。美はしい女が一人ならず、單なる好奇心ではなしに、それ以上の愛慕の情をこめて彼に見とれてゐたが、既にひがんでゐるイブラヒムは或ひはそれに少しも氣づかず、或ひはただ嬌態をのみ認めるだけであつた。しかし、彼の眸が伯爵夫人の眸と合ふとき、人をあてにしない彼の氣持は消え失せた。彼女の眼はいともやさしい氣だてをあらはし、彼との應待もかなりに打とけたものであつた

から、もはや彼女のうちに、嬌態や嘲笑の影を臆測することはおのづから出來なかつた。

戀をするなどといふ考へは腦裡にうかばなかつたが、今は毎日のやうに伯爵夫人に會ふことが彼には必要缺くべからざることとなつて來た。どこへでも出かけて行つて夫人をさがし、會へたとなれば、その度ごとに彼は思ひもよらぬ天のめぐみのやうに感じた。伯爵夫人は彼よりも先に、彼の感情を察した。誰が何といはうとも、期待や要求なしに戀する心は、あらゆる誘惑の掛引よりも一そう強く女の心を動かすものである。イブラヒムの姿が見えると、夫人は絶えず彼の一擧一動を見まもり、一語も漏らさじと彼の言葉に耳を傾けた。彼がゐないとなると、彼女は深い思ひに沈んで、いつものやうに呆然としてゐた。二人が互に心を寄せてゐることを最初に見てとつたメルヴィルは、イブラヒムに祝意を表した。凡そ、はたの者の氣勢を添へる言葉ほど、戀ごころを燃やさせるものはないであらう。戀は盲目である。さうして、それをそれと信ぜずに、そそくさと一切の賴りになるものにすがるのである。

メルヴィルの言葉はイブラヒムの心を眼ざめさせた。好きな女を己がものにすることが出來るなどと、彼は今といふ今まで夢想だにしなかつたが、忽ちに希望の光りが胸に射して來た。彼は我をも忘れて戀慕した。彼のひたむきな情熱に呆れた伯爵夫人が友情を傾け、常識を說いてこれ

を食ひとめようとした甲斐もなく、却つて當人がそれだけの氣力を失つてゐた。……かくして向う見ずな應酬が二人の間に、次から次へとつづいて行つた。つひに彼女は、自らかき立てた男の愛欲の力にひかされて、もはやそれに打ち克つ力もなく、恍然としてゐるイブラヒムに身を任せた……

何一つとして烱眼な世間の眼からかくされることはない。伯爵夫人の新たな關係は、間もなくあらゆる人々の知るところとなつた。彼女の選り好みに驚いた婦人もないではなかつたが、多くの者にはそれが當り前のことと思はれた。或る者は嘲笑し、或る者は自分たちの見方によつて怨すべからざる輕卒さを認めてゐた。最初に戀に醉ひしれてゐる間は、イブラヒムも伯爵夫人も、何一つ氣づかなかつたが、程なく二人の耳には、曰くありげな男どもの冗談や、皮肉な女たちの言葉が聞こえて來るやうになつた。イブラヒムの莊重にして冷やかな態度は、かやうな非難に自らの身をさらさずにも濟んだものであつた。彼は忍ぶべからざるを忍び、どうしてこれを擊退したらよいのかも分らなかつた。伯爵夫人は伯爵夫人で、世間からうける尊敬に馴れてゐたので、自分がいま嘲笑や誹謗の的になつてゐるのに平然と濟ましては居られなかつた。或ひは涙ながらにイブラヒムに訴へ、或ひは悲しげに男を非難し、或ひは空さわぎによつて全く豪なしになつて

は困るから、庇ふやうなことはしてくれるなとせがんだりした。

更にまた新しい問題が起きて、一そう彼女の立場を窮地におとし入れた。仇ごころの結果が覿面にあらはれてしまつたのである。伯爵夫人は自暴自棄になつて、このことをイブラヒムに告げた。嘗て男をなだめすかして、まことしやかに離れてくれなどと申し入れたのも、――一切が今は途方もないことになつてしまつた。伯爵夫人が破滅の避くべからざるを認め、捨鉢になつてその日を待ちうけてゐた。

夫人の身持になつたことが知れ渡るや否や、噂は一そうはげしく立てられ始めた。情にもろい婦人たちは恐怖のあまり、ため息をついた。男たちは伯爵夫人の產む子が白か黒かと賭をした。廣いパリーに、彼女の良人として納まつてゐながら、ただひとり何も知らずに、不審の念さへも起さずにゐる伯爵を諷した樣々な寸鐵詩がまき散らされた。

するうちに、宿命の時は近づいた。伯爵夫人の境遇は慘めなものであつた。イブラヒムは日毎に夫人を訪れた。彼は彼女の身も心もいよいよ力を失つて行くのを眼にとめてゐた。彼女は、思ひ出しては絕えず涙や恐怖を新たにした。つひに彼女は初めての陣痛を感じた。忽ちに然るべき處置が講ぜられた。先づ第一段として伯爵が遠ざけられた。やがて醫者がやつて來た。これより

さき、二日ほど前に、或る貧しい女は、生れたばかりのわが兒を他人の手に渡すやうに口說かれてゐたが、その子を引き取るために腹心の者が遣はされた。イブラヒムは、不仕合せな夫人の横たはつてゐる寢室のすぐ隣りの書齋に陣取つてゐた。彼は息をつく力もなく、夫人のたよりないうめき聲、はした女のささやき、醫者が物いひつける聲など聽いてゐた。夫人は永いこと苦しんだ。呻き聲の聞える度に、イブラヒムは胸をかきむしられるやうな思ひがした。また、聲の杜絕える暇々には、恐怖のために斷腸の思ひをさせられた……不意に彼は力ないみどり子の聲を聞きつけて、――もはや狂喜の色を押しかくすことも出來ずに、夫人の部屋へと馳け込んだ。見れば、黑い男の兒が彼女の足もとの床のうへに横たはつてゐた。イブラヒムは子供の方へ近づいた。胸ははげしく動悸をうつた。彼はふるへる手をあげて、わが子を祝福した。伯爵夫人は弱々しげに微笑みをうかべ、力ない手を彼の方へさしのべた……然し、醫者は產婦にあまりにも强いショックを與へることを慮れて、イブラヒムを寢床のところから引きさがらせた。今しがた生まれたばかりの嬰兒は蔽ひのある籠に入れられ、人目を憚る梯子づたひに、家の外に運び去られた。そこへ今度は別の嬰兒が運び込まれて、同じ寢臺の搖籃に寢かしつけられた。イブラヒムはいささか胸をなで下ろして立ち去つた。人々は伯爵の歸りを待ちうけた。夜おそく彼は歸つて來

て、夫人のめでたい安產の由を聞かされ、大滿足であつた。かくの如くにして、挑發的な騷ぎを待ち設けてゐた世間の人々は、見ん事あてが外れてやむなく蔭口をきいて意を安んずるよりほかはなかつた。何もかもが元の狀態にかへつた。

とはいへ、イブラヒムは、自分の運命がいづれは變らなければならないことや、遲かれ早かれ二人の關係が必らず、D＊＊伯爵の耳に入るべきことを感じてゐた。その時には、たとひ如何なることが起きようとも、夫人の身の破滅は免れられないのである。イブラヒムは心をこめて彼女を愛し、同時にまた愛されてもゐたのであるが、夫人はもともと我儘で、浮氣であつた。彼女は何も、初めて戀をした譯ではなかつた。いとも優しい今の氣持にかはつて、嫌惡や憎惡の念がやつて來るかも知れなかつた。イブラヒムは夫人の心の熱の冷める時を豫見した。今までは嫉妬なるものを知らずに來た彼ではあつたが、それをも今は身の毛のよだつ思ひで豫感し、それ位ならば却つてわかれの辛さの方が苦痛も少いに相違ないと想像して、今は不仕合せな交りを斷つて、住み慣れたパリーをあとにし、かなり久しい前からピヨートルにも招かれ、自己の本分を思ふ暗澹たる氣持にも引きよせられるロシアにむかはうとのつもりになつてゐた。

2

美しきものも、さほど愉しからず、
よきひとも、さほどに眼にはとまらず、
こころもまた、さほどに浮氣ならず、
われはまた、さほどに安らかならず！……
名譽を望みて、惱むこといささかならず、
讃めうたのさわがしき聲をわれ耳にす。

——デルジャーヴィン——

いく日、いく月を重ねても、戀の奴たるイブラヒムは、自ら口説いた女を、徒らにふり棄てる傾りには、どうしてもなれなかつた。伯爵夫人は時々刻々と、戀慕を募らせてゐた。二人の間に生れた男の子は遠い田舎で育てられた。

或る時のこと、イブラヒムはオルレアン公邸の招待會に列してゐた。すると、通りかかつた公

爵が、暇な時に讀むやうにといつて一通の手紙を渡した。これこそはピョートル大帝の親書であつた。彼が永らく歸つて來ない眞の理由を察せられた大帝は、公爵に宛てて、自分は如何なることがあらうとも、イブラヒムを束縛するつもりはないから、ロシアに歸るも歸らないも彼の意に任せる、いづれにしても自分はむかし自分が養つた子を常に見棄てる者ではないとの親書を寄せられたのであつた。この親書はイブラヒムを衷心から感動させた。この瞬間から、彼の運命は決せられた。彼は翌くる日、攝政に對して、間もなくロシアに歸るつもりであると申し傳へた。

「まあ、もう少し考へて御覽」と公爵はいつた、「ロシアはあなたの祖國ではない。再びあの灼けつくやうな故郷の土を踏むやうなことは、よもやあるまいとわしは思ふ。何しろあなたの永い間のフランス滯在は、半未開のロシアの氣候や生活樣式に馴染めないやうにしてゐる筈だから、あなたはピョートルの臣下として生れた譯ではない。わしのいふことを眞にうけるものです。大帝の贔屓なお許しをよいことにして、すでに血を捧げたフランスの國に留まることです。それに、こちらにゐても、あなたの勳功や才能が、それ相應に認められずにしまふといふ譯もないのだから、そこは意を安んじて可なりですよ。」

イブラヒムは心から公爵の好意を謝したが、もはや歸らうとする意志は牢固たるものがあつ

た。

「殘念だけれど、」と攝政はいつた、「聞いて見れば無理もない。」

彼は退職させる約束をして、一部四什をロシア皇帝に書き送つた。

イブラヒムは直ちに旅支度をした。出發の前日は、例によつてD＊＊伯爵夫人の許で宵を過した。夫人は何ひとつ知らなかつた。イブラヒムは彼女に歸國のことを打明ける元氣もなかつた。そこで、夫人も落ちつき拂つて、陽氣にしてゐた。夫人は幾たびか彼を身近くさし招いて、彼の物思はしげな樣子をからかつた。晩餐が濟むと、誰も彼もが散り散りになつた。客間には夫人と良人と、イブラヒムの三人がとり殘された。哀れな男は若しも夫人と二人きりになれたなら、この世の一切のものを投げ出したであらうが、、擬寶のわきにD＊＊伯爵が餘りにも落ちつき拂つて座を占めてゐたので、この部屋から逐ひ立てる望みもないらしかつた。三人が三人とも口を噤んでゐた。

「Bonne nuit（おやすみ）」と、つひに夫人がいつた。イブラヒムの胸はつまつて、ゆくりなくも、ありとある別離の辛さを感じた。彼は身じろぎだもせずに佇んでゐた。

「Bonne nuit messieurs（みなさんおやすみ）」と、夫人は繰り返した。

それでも彼はやはり動かなかつた……遂には眼がくらんで、頭がくらくらし出した。彼はやつとのことで部屋を出た。家に歸つて來ると、殆んど前後も辨へずに次のやうな手紙を書いた。

「いとしいオノラ、私は出立します、永久に御身を見棄てて、私がいま手紙を書くのは、かうでもしなければ氣持を打明ける勇氣がないからです。

「私の幸福はいつまでも續くものではなかつた。私は運命と自然に逆らつて、幸福を樂しんでゐたのです。御身も私に愛想をつかすのが當然であつた、幻も必ず消えるべきものであつた。この考へはいつもつきまとつてゐて、私がどうやら他の一切のことを忘れてゐたやうな時も、御身の足もとにひれ伏して、御身が熱情を傾けて我が張つたり、限りない優しさを見せたりするのに醉ひ心地でゐたりした時にさへも離れなかつたものです……輕卒な世の人々は、理窟のうへでは許してゐることさへも、實際のこととなると容赦もなく責め立てるものです。世の人の冷やかな侮りが、遲かれ早かれ御身を征服して、燃えるばかりの心をやはらげて、遂には御身も自身の愛情を恥づかしく思ふに相違ない……そのとき、私はどうすればよいのか？　いやいや、その怖ろしい時の來ない先に死んだ方がましだ、御身を棄てた方がましだ……

「御身が安らかにゐてくれることが私にとつては何よりも大切なことです。心ない世間の人の

眸が私たちの上に注がれてゐたとき、御身は安らひといふものを味ははなかつた。御身が堪へ忍んだ一切のこと、あの自尊心を傷つけたあらゆること、あの恐怖の苦しさを思ひ出してごらんなさい。私たちの子の怖ろしい誕生をよくよく思ひ返してごらんなさい。思つて見るがよい、このうへにまた同じやうな動揺と同じやうな危難を御身に負はせてよいものかどうか？　御身のやうに優しく美しい人と、惨めで人間と呼ぶことさへもどうかと思はれる黒奴が、運命を共にするやうに努めるなど、いはれのないことではありませんか？

「レオノラよ、さようなら。私のたつた一人の友よ、さようなら。私は御身を見棄て、私の生涯の最初にして最後の愉しさを見棄てる。祖國もなく、親しい人もない私は、寂しいロシアへ行つて、いさぎよく全くの孤獨のうちに暮らしませう。これから私の服する嚴しい勤めは、歡喜と幸福の思ひ出を拭ひ去つてくれないにしても、少くとも和らげてくれるでせう……。ではレオノラよ、さようなら！　私は御身の温い腕を離れるやうな思ひで、この手紙と別れるのです。さようなら。幸福に暮して、時にはこの哀れな黒奴を、御身のまことの友イブラヒムの上を思ひやつて下さい。」

その晩のうちに彼はロシアへ向けて出立した。

この度の道中は今まで考へてゐたほど辛いものとも思へなかつた。想像が現實を制禦してゐたのであつた。パリーの町を遠ざかれば遠ざかるほど、自分の永久に見すてて來たものが、いよいよ活々と、近しく胸に描かれて來た。

それとも思はぬうちに、いつしか彼はロシアの國境に來てゐた。既に秋風が立つてゐたのに、馬車は悪路を物ともせずに疾風のやうな勢ひで彼を運んで、道中の十七日目の朝には、その頃の國道の通つてゐたクラスノエの郷に辿り着いた。

ペテルブルグまでは二十八露里の道のりであつた。馬車に馬をつけてゐる間に、イブラヒムは宿場の小舍にはいつた。見ると、小舍の一隅に、緑いろの長衣（カフタン）を着た背の高い男が、燒物のパイプを口にして、卓子に肘をつきながら、ハンブルグの新聞を讀んでゐた。誰かが入つて來たのを聞きつけて、彼は首をあげた。

「おう、イブラヒム」その男はベンチから立ちあがりながら叫んだ。「よう來たな、お前。」

イブラヒムはピョートル大帝自身たることを知つて、喜びのあまり馳け寄つたが、一歩前で恭しく立ちどまつた。大帝は身を近づけて、彼を抱擁し、額に接吻を賜はつた。

「お前が歸つて來るといふ報せをうけて、」とピョートールは言つた、「迎へに來たのぢや。こ

こにもう昨日から待つてゐるのだ。」

イブラヒムは感きはまつて、お禮の言葉も出なかつた。

「さあお前の車は、後から來るやうに言ひつけて。」と、大帝は仰せいだされた、「お前はわしの馬車に乘つて、一緒にわしのところへ行かう。」

大帝の馬車が曳き出された。大帝はイブラヒムと同乘して、馬車を驅つた。一時間半ほどして、彼らはペテルブルグに着いた。イブラヒムは好奇の眸をかがやかせ、大帝の指圖によつて新たに生れた都を眺めた。あらはな堰、築堤のない運河、木橋などが、到るところに、自然の抵抗を征服してから間もない人間の意志を示してゐた。あちこちの家は、いかにも急ごしらへらしかつた。全市を通じて壯麗なものといへば、ネヴァ河をおいて他になく、これは今なほ花崗岩の岩壁に飾られてゐなかつたが、すでに大小の軍艦や商船をうかべてゐた。大帝の馬車は宮殿、すなはち「ささいの苑」のにはさきに停つた。

車寄でピョートルを迎へたのは、三十五ぐらゐの婦人で、容貌は美しく、パリーの最新流行の衣裳をつけてゐた。

ピョートルは彼女に接吻してからイブラヒムの手をとつて、言ふのであつた。

「カーチェンカ[4]、どうぢやな、わしの名づけ子が分るかな！昔通りに目をかけてやつてくれ。」

エカテリナ[5]は青年の、黒い射るやうな眼を見つめて、親しげに手をさしのべた。彼女のうしろには、若く、背が高く、すんなりとして、薔薇の花のやうにみづみづしい美女が二人立つてゐたが、やがて恭々しくピョートルに近づいた。

「リーザ」と大帝は若い娘の一人にいつた、「覺えてゐるかい、お前にやるつもりで、オラニエンバウム[6]の苑からわしの林檎を盜んだ小ちやな黒坊をな？　あの子がここに居る、お前に引き合はせてやらうよ。」

皇女は微笑みをうかべて、顏を赧らめた。一同は食堂にはいつた。大帝の來るのを待ちうけて食卓は整へられてゐた。ピョートルはイズラヒムをも招いて、一族の者と食卓に着いた。

食事をしてゐる間、大帝は彼を相手に、よもやまの話をした。スペイン戰役のことやフランスの國内情勢、或ひは兎や角いひながらもやはり大好きな攝政のことなど、根堀り葉堀り訊ねた。イブラヒムは、觀察の行き屆いたしつかりした才智を示したので、ピョートルはイブラヒムの返答に大滿悅であつた。彼は幼年時代のイブラヒムの風貌などを思ひ起して、いかにも善良さうに、陽氣な口振りで物語るのであつた。かやうな大帝の樣子は、客の好きな人なつこい主[あるじ]として、こ

れがあのポルタヴァ[7]の役の英雄であり、威勢人を壓するごときロシアの改革者であらうとは何びとにも察しがつかなかつた。

食事のあとで大帝はロシアの習慣に從ひ、午睡をしに出て行つた。イブラヒムは皇后および二人の皇女と共にあとに殘つた。

彼は一同の好奇心を滿足させようとして、パリーの生活の樣式や、かの地の祝祭のこと、得手勝手な流行のことなどを、具さに聞かせるのであつた。そのうちに帝の側近の者が數人、宮殿へと參集した。イブラヒムは威風堂々たるメンシコフ[8]公を見わけた。公の方でもエカテリナと言葉を交してゐる黑奴を認めたが、誇りかに流し目を送つただけであつた。ピョートル大帝の峻嚴な顧問官たるヤーコフ・ドルゴルッキイ[9]公、ロシアのファウストとして民衆の間に聞えてゐた碩學ブリュース[10]、嘗ての友達であつた年若きラグゥジンスキイや、或ひはその他の上申書を携へて來たり、或ひは命令をうけようとする人などが續々と參内した。

大帝は二時間ほど經つてから出御した。

「さあ、一つ、」と大帝はイブラヒムにいつた、「お前が昔の仕事を忘れないでゐるかどうか、やつて見よう。石盤板を持つて、あとからついておいで。」

ピョートルは旋盤工場に閉ぢ籠つて、幾多の國務に携はつた。彼は順々にブリュース、ドルゴルゥキイ公、警務總監デヴィエル等を引見して、若干の勅令や勅裁をいブラヒムに口授した。イブラヒムは、大帝の明敏にして的確な理性や、力量、濶達自在な注意力、乃至は行くとして可ならざるなき活動ぶりに驚嘆せずには居られなかつた。仕事が終ると、ピョートルは覺書用の手帳を取り出して、その日になすべき豫定が全部とどこほりなく濟んだかどうかをあらためた。それから工場を出しなに、イブラヒムにいつた。

「もうだいぶ晩い、多分お前も疲れただらうから、今晩は昔のやうに、わしのところへ泊るがいい。明日になつたら起してやる。」

ただ一人とり殘されたイブラヒムは、初めて我にかへることが出來た。自分は今ペテルブルグへ來てゐるのだ。まだ、幼年の頃には近くに居りながら、それだけの値打も知らずにうかうかと見過ごして來た偉大なる人物を今にして改めて見直したのだつた。彼は心の底で、D＊＊伯爵夫人のことばかり考へて一日を暮さなかつたのは、一別以來今日が初めてであることを、悔悟をうかべながら自覺した。また彼は、自分を待つてゐた新しい生活樣式、活動や不斷の仕事が、愛欲や懶惰や、ひそかな倦怠に疲れてゐる心を蘇らしてくれるかも知れないと考へた。偉大なる人の

協力者となつて、彼と共に心を合はせ、大國民の運命に影響を與へることを考へては、初めて彼のうちに清廉な功名心が眼ざめて來た。彼はかやうないい機嫌になつて、そこにわざわざしつらへられた行軍用のベッドに横たはつたが、忽ちいつもの夢は遙かに遠いパリーの都に馳せてなつかしい伯爵夫人の胸にかへらせてしまつた。

3

空にかかつた雲のやうに、
仄かな俤、
我々の心を變へさす
けふは愛して、あしたは憎み
——キューヘルベッケル(11)——

次の日になると、ピョートルは約束たがはずイブラヒムを呼び起して、みづから隊長となつてゐるプレオブラジェンスキイ聯隊の砲兵隊附の少佐に任ずる旨を傳へて祝ふのであつた。宮仕への人たちはイブラヒムを取り圍んで、いづれも思ひ思ひに、新しい寵臣の御機嫌をとらうと勉めてゐた。傲慢なメンシコフ公までが、馴れ馴れしく握手をした。シェレメンチェフ(12)はパリーにゐる知人の消息を訊ね、ゴローキンは晝食に彼を招待した。このやり口を他人たちも見倣つたので、イブラヒムは少くとも、まる一月といふもの、毎日のやうに招待をうけつづけてゐた。

イブラヒムは單調ながらも、せはしい日を送つてゐたので、おのづから退屈することを知らなかつた。彼は日ましに大帝を慕つて、一そうよく高邁な氣象を理解した。偉大なる人物の思想に從ふことは、極めて興味のある學問である。イブラヒムは、ピョートルが元老院にあつて、プトウルリンやドルゴルゥキイを相手に、重要な立法案を審議したり、海軍省にあつて、ロシアの海軍力を批准したり、休息の時にフェオフアン、ガブリール、プジンスキイ、コビエーキッチなどと、外國政論家の書いたものの飜譯を點檢し、或ひは商人の工場や、手工業者の仕事場、學者の書齋などを訪問するのを目にとめた。ロシアなるものはイブラヒムの眼には一つの大きな機械が動き、勞働に從事する者が、各々新しい體制に服して、自己の仕事についてゐる巨大な工場のごとき觀を呈してゐた。彼もまた當然、自己の仕事臺について働かなければならないと考へて、できうる限り愉しい巴里の生活を哀慕することを控へようと努めた。何よりも難かしいのは、別のなつかしい思ひ出であつた。D＊＊伯爵夫人のことが屢々胸にうかんで、女彼の無理もない怨み言(こと)や、涙や、悄れた樣子を想像した……しかも、どうかすると、怖ろしい考へが胸をしめつけた。上流の社交界の人たちの浮氣、新しい交渉、他の果報者――それを思ひおこしては慄然とした。嫉妬の念がアフリカ人の血潮をわき返らせ、熱い涙が黑い顏を傳うて流れんばかりであつ

た。

或る朝、事務上の書類にとりかこまれて、自室に坐り込んでゐると、いきなりフランス語で聲高らかに挨拶する聲が聞えた。イブラヒムは威勢よく振り返つたが、見れば彼が巴里の上流社界の眞つ唯中に置いて來た年若いコルサーコフで、喜びの叫びをあげながらイブラヒムに抱きついた。

「たつたいま着いたばかりで」と彼はいつた、「着くなり眞直ぐにここへ駈けつけたんだ。パリーの君の知人たちからよろしくとのことだつた。君がゐないのを殘念がつてゐるんだ。D＊＊夫人からは是非とも來てくれとの言葉だ。ほら、これが夫人からの手紙だ。」

イブラヒムは慄へる手で手紙を受け取り自分の眼を信じようともせずに見覺えある上書(うはがき)を見つめた。

「まあ嬉しいこと、」とコルサーコフは續けた、「よくも君は、この野蠻なペテルブルグで、退屈に殺(や)りこめられなかつたもんだ！　ここで、みんなはどうしてるんだらう、何をやつてるんだらう？　君の服屋はどこ？　もうオペラくらゐは出來てるだらうね？」

イブラヒムは呆然として、陛下は多分、今頃は造船所でお働きであらうと答へた。するとコル

サーコフは笑ひ出した。

「なるほど、」と彼はいつた、「今は君も、僕なんか問題ぢやないんだね。そんならまた改めて、別のときに、ゆつくり話すとしよう。僕は陛下に御挨拶に行く。」

かういつて、彼は片方の足でぐるりと向き變はつて、さつさと部屋を出て行つてしまつた。

イブラヒムはただ一人になると、大いそぎで手紙の封を切つた。伯爵夫人は彼の裏切りと頼みにならないことを責めながら、やさしい不平を並べてゐた。

「あなたは、」と彼女は書いてゐた、「わたしの無事でゐることが、この世の中で何よりも大事だとおつしやいますね、イブラヒム！　若しも、おつしやることに間違ひがないなら、思ひもよらない出立の知らせで、慘めな境遇に私を陷れることなど、出來る筈がないではありませんか？　あなたは私が引きとめはしないかと心配しておいでした。けれど、はつきり申しますけれど、どんなに私があなたを思つてゐたからとて、あなたの幸福、あなたが義務と考へていらつしやることのためならば、自分の氣持をいけにへにすること位は出來た筈ですのに。」

夫人は最後に、あくまでも思ひをかけてゐる由を誓ひ、若しも二度と相見る時が來ないのならば、せめて時折は手紙でも寄せてくれるやうにと、執拗に懇願してゐた。

イブラヒムは、我を忘れて、この上もなく貴い文字に接吻しながら、幾たびとはなしに、この手紙を讀み返した。彼はたまらなくなつて、軍港へ行けばコルサーコフがゐるだらうと期待し、何かしら伯爵夫人のことを聞かして貰はうとの一念に驅られて、軍港へ行かうとした。ところへ、ドアがあいて、當のコルサーコフが又もやあらはれた。既に彼は大帝に挨拶して來て、いつものやうに極めて上機嫌らしく見うけられた。

「Entre nous（アントル　ヌー）（よそでは言へないが）」と彼はイブラヒムに向つて言ふのであつた、「陛下はとても奇人でいらつしやる。考へても見たまへよ。僕はね、粗麻（ろさ）のジャケツみたいなのを召してられるところをお目にかかつたんだ。それも新造船のマストの上と來てゐるんで、こつちは仕方なしに公文書を持つて攀ぢ上つたんさ。僕は繩梯子につかまつて立つてゐるので、それ相當の敬禮をしようと思つても、うまく足場がとれなかつたよ。いや、全く參つたよ。生れてからこんなことは初めてだ。それはさうと、陛下は書類に眼を通されると、僕を頭のてつぺんから足のさきまで御覽になるのさ。多分これは僕の身だしなみの粹なところが、ひどく御氣に召したものだらうよ。かりそめにも、微笑みをうかべられて今晩の夜會（アッサンブレ）に來いとの思召しだつたんだ。ところが、ペテルブルグへ來ると、まるで僕は椋鳥さ。七年も國を出てゐるうちに、こつちの習慣をす

つかり忘れてしまつたんだ。頼むから、僕の先生になつて、よろしく案内してくれよ。」

イブラヒムは承諾をして、さつと話題を一そう自分に興味のあることに轉じてしまつた。

「さあ、どう、D＊＊伯爵夫人は？」

「伯爵夫人つて？　そりや、むろん、初めのうちは君に立たれてひどく悲しんでゐたよ。それから、言ふまでもないことだが、次第に氣が和らいで、新しい男を見つけた。さあ誰だか知つてるかなあ？　あの背高坊主のR侯爵だよ。一體、なんで君はそんなに、黒ん坊の白眼を圓くするんだい？　それとも變な氣がするんかね？　永いこと悲しむなんてことは人間の生れつき、わけても女の性に合はないつてことを君は知らないのかな。そこんところをよく考へて見たまへな。僕はまあ、家へ行つて、旅の疲れを休めよう、では、きつと寄つてくれ給へ。」

イブラヒムの胸はいかなる感情に充たされたであらうか？　嫉妬の念か、憤激か？　絶望か？　否、それは深い、胸もつまるやうな悒愁であつた。彼は我とわが身にくり返した。これは前に見拔いてゐたことだ。かうなるのが當り前だつたのだと。やがて、夫人の手紙をあけて、再び讀み返しうなだれながら、ひどく泣き出した。彼は永いこと泣いてゐた。涙が胸の苦しさをやはらげた。時計を見ると、もはや出かける時刻になつてゐた。イブラヒムは逃げることが出來れば大喜

びであつたらうが、集りは義務的なことで、大帝は嚴重に側近の者の出席を要求してゐたのである。彼は服裝をととのへて、コルサーコフを迎へに出かけた。

コルサーコフは寢卷を着てフランス語の本を讀みながら坐り込んでゐた。イブラヒムの姿を見ると、

「こんなに早く？」といつた。

「冗談ぢやない。」と相手は答へた、「もう五時半だよ、遲れるぜ。さあ、早く支度をして、行かうよ。」

コルサーコフはあわてふためいて、力いつぱい鈴を鳴らした。召使たちは駈けつける。彼はそそくさと支度をしにかかつた。フランス人の從僕が赤い踵のついた沓や、青い天鵞絨のズボン、金びかの縫ひとりをした薔薇いろの長衣（カフタン）などを彼に渡す。玄關の間（ホル）で大いそぎに髮粉を振つた鬘が捧げられる。コルサーコフは刈り込んだ頭に鬘をかぶつて、サーベルと手袋を取りいださせ、十ぺんも鏡の前で、と見かう見してから、いよいよ支度が出來たとイブラヒムに告げる。二人には熊の皮の外套がかけられて、つひに多宮さして出かける。

コルサーコフは途中、イブラヒムにさまざまな質問を浴びせかけた。ペテルブルグ一の美人は

誰かとか、誰が第一の踊り手かとか、今はどんな踊がはやつてゐるかなどと。イブラヒムは、不承々々相手の物好きな質問に答へてやつてゐた。そのうちに、二人は多宮に乗りつけた。夥しい長轎や、古風なガタ馬車、金色のまばゆい輕馬車などが早くも芝生に立ち並んでゐた。車寄の傍には、お仕着せを着て、口髭をはやした馭者たちや、金銀の絲も美しく、鳥の羽の飾りをつけて、鎧矛を携へた飛脚、華やかな服を着た從僕や小姓、主人の外套や手套(13)を擔いだ無恰好な從卒など、その時代の貴族の考へでは、必要缺くべからざるものとされてゐた隨員が群がつてゐた。そこへイブラヒムが姿をあらはしたので、彼らの間には一せいに囁く聲がおこつた。

「黑んぼ、黑んぼ、陛下の黑んぼ。」

彼は逸早くコルサーコフを連れて、この色とりどりの僕どもの間を通り抜けた。式部官が扉を開けてくれて、二人は廣間に入つた。コルサーコフは急に立ちすくんだ。……煙草のけむりが一面に立ちこめた中に仄かに燃える獸脂蠟燭のあかりに照らされた大きな部屋には、肩に綬を帶びた貴族たちや、使臣や、外國の商人、綠いろの軍服を着た近衞の士官、短い上衣に縞のズボンをつけた造船技師などが、群れをなしてやむ時もない吹奏樂の音につれて、前にうしろに動いてゐた。貴婦人たちは壁の近くに腰をおろしてゐた。そのうちの若い連中は流行のあらゆる粹をこ

らして、麗しく着飾つてゐた。彼女たちの夜會服の金や銀の色が眩ゆかつた。環骨(わぼね)で張り擴げたスカートから草の莖のやうに、ほつそりした女の胴がぬきいでて、耳たぶにも、長い毛房にも、頸のあたりにも、寶石がかがやいてゐた。彼女たちは、相手の男が出來て踊りの始まるのを待ちわびながら、陽氣にぐるぐると廻つてゐた。中年の婦人たちは、既に廢れてしまつた服裝の型を、新型に合せることに躍起になつてゐた。頭布はナターリヤ・キリーロヴナ大后の黑豹の帽子にそつくりだし、寬袍(ローブコンド)やケープは、何となく袖無(ケラフアシ)やちやんちやん子を思はせた。どうやら、彼女は滿足、といふよりは寧ろ驚異の念をもつて、この輸入早々の舞踏の席に臨んでゐるらしく、縞目の麻布(あさぬの)のスカートに眞赤なジャケツを着て、靴下を編みながら、まるで自宅にでもゐるかのやうに、互にうちとけて談笑してゐる和蘭の船長たちの夫人や娘の方を、怨めしげに横目で見てゐるのであつた。新客が來たのに氣がつくと、給仕はお盆に麥酒とコップをのせて、つかつかとやつて來た。コルサーコフはまだ正氣にかへれなかつた。

「Que diable est-ce que tout cela.(クー・ディアーブル・エ・ス・ク・トウ・スラ) (まあ、なんてどえらいきわぎだらう)」とコルサーコフは聲ひくくイブラヒムに訊ねた。イブラヒムは微笑まない譯には行かなかつた。皇后と二人の皇女は、いとも美しく、裝ひも麗はしく、客たちの居並ぶ間を、彼らと愛想のよい言葉を交しなが

ら、そぞろに歩を運んでゐた。大帝は別室に居られた。コルサーコフは、大帝にまみえようと欲して、絶えず動いてゐる人波をやうやくのことでかきわけて行つた。別室に控へてゐるのは、大部分が外國人で、尤もらしく燒物のパイプをくゆらし、やはり燒物のコップできこし召してゐた。卓子のうへには、麥酒や葡萄酒の壜、煙草の入つた革の袋、ポンスの杯や將棋の盤などが置かれてゐた。ピョートルはそのうちの一つの盤にむかつて、肩幅の廣いイギリス人の船長を相手に將棋を差して居られた。二人はしきりに煙草のけむりを吐いて、禮拜を交してゐた。大帝は相手の思ひがけない駒の動きに當惑させらるること甚だしく、コルサーコフが來たのにも、たとひ彼が二人のまはりをぐるぐる廻らうとも、一向にお氣づきにならなかつた。このとき、胸に豐かな花束をつけた肥つちよの紳士が慌しく入つて來て、舞踏が初まつたことを聲高らかに告げて、直ぐにまた立ち去つた。そのあとからは澤山の客が、ついて行つたが、中にはコルサーコフもまじつてゐた。

思ひもよらぬ場面が彼を驚かした。舞踏の間の入口から奥にかけて、泣き出しさうな樂の音につれて、婦人たちと踊り相手の男たちが、二列にわかれて向き合つて立つてゐるのである。男の方で最敬禮をすると、女の方では一そう恭々しく跪拜し、しかも最初は前を向き次にはくるりと

右を向き、やがて左、それからまた右といふやうに、それをくり返してゐた。コルサーコフはこの手の込んだ暇つぶしを眺めて眼をみはり、唇を嚙んだ。跪拜と會釋は、小半時間も續いた。そのうちに、それもやんで、例の花束をつけた肥つた紳士が、儀式の舞踏の終つた旨を宣し、樂士にミニュエットを奏するやうに命じた。コルサーコフはやれやれと喜んで、男を見せる心がまへをした、若い客たちの中に、一人の令孃が殊のほか彼の意に叶つた。年の頃は十六ばかりで、豪華な、しかも高雅な服裝をして、中年の紳士のわきに坐つてゐた。コルサーコフは飛ぶやうに近づいて行つて、踊りの相手になつて頂きたいと願望した。美しい少女は當惑げに彼を見て、挨拶のしやうも辨へぬらしかつた。彼女のわきに腰をおろしてゐる紳士は一そう苦い顔をした。コルサーコフは少女の決心を待つてゐた。そこへ花束の紳士が近寄つて來て彼を廣間の眞ん中へ連れ出して、鹿爪らしくいつた。

「貴殿、貴殿は間違つたことをなされた。第一に、あの若いお方に近づかれるのに、三たび禮をすることを怠りなすつた。次に、ミニュエットの時には、婦人の方からしか相手を選ぶ資格がないのに、貴殿は、勝手にこちらから選びなすつた。こんなことをなすつたからには、重刑をうけることになりますよ。つまり「大鷲の杯」[14]を乾すのが當然なんですよ」

コルサーコフはいよいよ以て驚かされた。忽ちに客が彼をとりかこんで、聲さわがしく刑の即時執行を要求した。ピョートルはこのやうな處刑の場に臨むことが大好きであつたから、笑ひざめく聲を耳にするとさつそく別室から出て來た。大帝があらはれると人々は道を明けた。大帝は群がる人の輪の中に入られたが、そこには、罪びとが佇み、その前にはマルヴァン酒(16)をなみなみとついだ大杯を捧げた夜會の主が立つてゐた。夜會の主は、罪人にむかつて潔く法を遵奉するやうに說きつけたが、その甲斐もなかつた。

「ははあ、」とピョートルは相手がコルサーコフたることを認めて口を出した、「やあ、引つかかつたな。ムッシュ飲み給へ、顏をしかめんでな。」

かうなると、二進も三進も行かなかつた。あはれな伊達者は、息をつかずに乾杯して、それを夜會の主にかへした。

「なあ、コルサーコフ」とピョートルがいつた、「お前のズボンは天鵞絨だな、そんなものはわしも穿いてゐないぞ。それでもお前よりはずつと金持だよ。それは、無駄づかひといふもんだ。尤も、わしがお前の惡口をいつたんでないことは察しろよ。」

この叱責を聽き終つたコルサーコフは、人の輪をぬけ出さうとしたが、ふらふらとして、今に

も倒れんばかりであつた。それがまた、大帝を初めとして、陽氣な連中に、一方ならぬ滿足を與へた。

このエピソードは大事な踊りの全體の調子や興味を傷つけなかつたばかりでなく、却つて一入の生氣を與へた。相手の男どもは足を摺つて會釋を始め、婦人たちは膝をかがめてお辭儀をし、一そう熱心に、小さな踵を鳴らし始めて、もはや歩調などには氣もとめなかつた。コルサーコフはもう、陽氣な仲間に加はることも出來なかつた。彼が選んだ令孃は、父親がヴリーラ・アファナシエヴナ・ルジェフスキイの指圖によつて、イブラヒムに近づき、青い眼を伏せて、おづおづと手をさしのべた。イブラヒムは彼女を相手にして、ミニュエットを踊り終ると、彼女を元の席につれ戻り、それからコルサーコフをさがして、廣間の外へつれ出し、馬車に乘せて家にかへつた。途中で、初めのうちはコルサーコフも「忌々しい會だ！……大鵞の杯め！……」などと、ぶつぶつ言つてゐたが、間もなくぐつすりと眠り込んで、家へ着いたことも、服をぬがされて寢かせられたことも、さつぱり分らなかつた。翌くる日に眼がさめたとき、頭痛がして、足を摺る音や、膝をついてする禮や、煙草のけむり、花束をもつた紳士、大鵞の杯などが、仄かに思ひかへされた。

4

われらが遠つみおやは、かく忙しくは、食さざりき
すうぷの匙や、わきかへる
醇酒をうかべし銀のさかづき、
かく忙しくは、めぐらざりけり
——ルスランとリユドミーラ——

さて、ここで私は好意をもたれる讀者諸君に、ガヴリーラ・アファナシエヰッチ・ルジェフスキイを御紹介しなければならぬ。彼は古代の大貴族の出で、廣大な領地を有し、客を迎へることや、鷹狩りをすることを好み、屋敷に置く僕婢も夥しい數に上つてゐた。一言にしていへば、彼は生え抜きのロシア風な貴人であつた。その言ひ草をかりると、ドイツ精神には我慢がならず、家庭内にあつても、彼の愛する昔の習慣をとどめようと努めてゐた。

娘はもう十七歳になつてゐた。まだ幼かつた時分に、彼女は母に死なれた。彼女は昔風に育て

られた。つまり、數多の老女、乳母、附添、小間使などに取かこまれてゐたのである。金絲の刺繍は出來たが、讀み書きは知らなかつた。父親は外國のこととなると、何から何まで忌み嫌つてゐたが、自宅に住んでゐるが囚はれのスエーデン士官にドイツ式の舞踏を習はうといふ娘の願ひをはねつけることは出來なかつた。このお抱への舞踏の教師は、五十歳にもなつてゐて、右の脚はナルヴァの役に貫通銃創をうけてゐたので、ミニュエットやクーラント踊はうまく行かなかつたが、その代りに左の脚は、極めてむづかしい歩をも、實に巧妙に易々とやつてのけた。

教へ子の勉强ぶりは見上げたものであつた。ナターリヤ・ガヴリローヴナは大帝の夜會に出て一流の踊り子と謳はれた。このことがいささかコルサーコフの過ちの原因となつたのであつて、彼は翌くる日に、父のガヴリーラ・アファナシエヰッチのところへ、詫びを言ひにやつて來た。ところが、この若い伊達者の拔け目がなく伊達なところが、傲岸な貴族の意に叶はなかつたので、忽ち彼を辛辣にもフランス猿と綽名した。

祭の日のことであつた。ガヴリーラ・アファナシエヰッチは若干の親類や友人を招待した。古風な廣間の長い食卓に酒宴の用意がなされた。客たちは、勅令と、大帝みづからの垂れ給うた範によつて、つひに家庭内に幽居することを解かれた妻や娘をつれて集つて來た。ナターリヤが各

各の客に、黄金の杯をのせた銀の盆を配れば、一同はこのやうな時に昔は接吻を交されたものが、今では廢れてしまつたのを惜しみながら、乾杯した、それから食卓につく。主人のわきの第一の席には、八年七十になる大貴族で、義父に當るポリス・アレクセィキッチ・ルイコフ公が着席した。そのほかの客は、門地の古いことを重んじ、嘗て席爭ひをした頃の樂しさを思ひ返しながら、男と女と、兩側にわかれて席についた。末席のいつもの場所には、古風なジャケッに頭巾を着けた老女中や、氣取りやで、三十だといふのに皺だらけのちび女、青い七つ下りの軍服を着た囚はれのスエーデン人などが坐つた。夥しい御馳走を並べた食卓は、あくせくしてゐる澤山の召使たちに取り圍まれてゐたが、そのうちにも、いかめしい眼つきをして、肥つた腹をつき出し、威嚴を保つて不動の姿勢でゐる家令が際立つてゐた。——食事が初まつた最初のうちは、誰もがひとしく、古風なロシア料理の味に氣をとられてゐて、皿にせはしいスプーンの觸れる音ばかりが、靜寂をみだしてゐた。するうちに、遂に主人は歡談をすべき時刻になつてゐることを認めて、ふとわきを向いて訊ねた。

「エキーモヴナは一體どこにゐるんだらう？　ここへ呼んでおいで。」

幾人かの召使が、そちこちへまつしぐらに駈け出さうとした。すると丁度そのとき、花や金銀

143030

の絲の裝ひも美しく、花模樣の緞子の寬（ローブ・ド）袍をまとつて、頬と胸をあらはにし、白粉をつけ頬紅をつけた老婦人が、鼻唄まじりに、踊りながら入つて來た。彼女があらはれると、一同は大喜びであつた。

「御機嫌よう、エキーモヴナ、」とルイコフ公がいつた、「どうだ、この頃は？」

「はい、心も達者、身も達者、唄もうたへば踊りも踊る、花むこさまを待つてゐますで。」

「おうい、どこにゐたんだい？」と主人が訊いた。

「はい、大事なお客樣がいらして、お目出たいお祭とあつて、おめかしをして居りましたので、天子樣の御命令、お殿樣の仰せによつて、皆樣方にドイッ好みで、せいぜい笑つていただきませう。」

こんなことを言ふので、みんなはどつとばかりに大笑ひをしたが、阿呆女は主人の椅子のうしろに動きもせずに立つてゐた。

「阿呆といふものはほんとに馬鹿なことばかり言ふものですけど、たまには本當のこともいふものですよ、」と主人に心から尊敬されてゐる姉のタチヤナ・アファナシエヴナがいつた、「ほんとに、今日のつくりはすばらしいお笑ひ草ですよ。若しも、皆樣が髯をおとして、尻切れの百

姓外套でもお召しになつたら、もう女のぼろのことなんかは、むろん、いふがものはないでせうよ。それこそ、女の長衣(ヤヅフアン)や、娘たちのリボンや、百姓女の頭巾は可哀さうなものですよ。まあ、今どきの美人をごらんなさい。可笑しくもあの髪粉をふつたり、お腹を今にもちぎれさうに緊めつけたり、下袴を環で無理にひろげたりして、まるで樽のやうになつて馬車に乘つたり、戸口を入るときは、身をこごめたり、立つにも坐るにも、息をするにも、大へんな苦勞で、それこそ殉教者のやうなものですよ。」

「おお、タチヤナ・アファナシエブナ?」とキリール・ペトローキッチ・Tがいつた。これはもと、リャザンの縣知事をしてゐた男で、そこにゐるとき、三千の農奴と若妻とを、いづれもよろしくないことで手に入れた人である、「私の考へでは、細君には好きな服裝(なり)をさせるべきものです。たとひ乞食女のやうにであらうと、支那人形のやうにであらうと、それは構はない。ただ、毎月々々新しい着物をあつらへて、元のが新しいのに棄てるやうなことはさせたくないものです。昔は、孫娘の嫁入りにおばあさんの長衣で間に合つたものですが、けふ日の寛袍(ローブ・ロンド)はどうでせう。今日は奥樣が着て、明日は女農奴(をんな)が着るといふ始末ぢやありませんか。こんなことで、どうしませう? ロシア貴族も滅亡ですよ! みぢめなものです、ただそれだけのことだ!」

こんなことを言ひながら、彼は溜息まじりに夫人のマリヤ・イリイニシナを見やつたが、彼女には、昔ぶりの禮讃も、今樣排擊も氣に入らないらしかつた。ほかの美女連中も、同じく不滿であつたが、別に何もいはなかつた。といふのは、その頃は控へ目といふことが、若い女性に缺くべからざる美德とされてゐたからである。

「では、誰の罪でせうか?」とガヴリーラ・アファナシエキッチが酸汁(シチユー)の壺に泡を立てながら言つた。「われわれ自身ではないかしら? 若い女どもに馬鹿なことをさせておいて? われわれは女の言ひなりになつてゐる。」

「でも、仕方がないぢやありませんか、われわれの意志でもないのに。」とキリーラ・ペトローキッチが言葉を返した、「どうかすると、亭主は細君を屋根裏へ閉ぢ込めるのを喜ぶのに、細君の方は鳴物入りで夜會へ連れて來られる。亭主は鞭(はり)をとり、女房はおめかしをするといふ譯です。ああ、夜會、われわれの罪に對して、神樣は夜會をもつて罰しなすつたのです。」

マリヤ・イリイニシナは、刺の山に坐つてゐるやうな氣持であつた。舌がむづ痒くなつて來た。つひにはやり切れなくなつて、良人の方に向き直ると、彼女は皮肉な笑ひをうかべながら、何か夜會に害があるのかと訊ねた。

「大いにある、」と、むきになつて良人は答へた、「あれが初まつて以來、女どもがのさばり出して、亭主は女房を御しにくくなつた。女房どもは、『妻は良人を畏るべし』といふ使徒の言葉を忘れてしまつた。氣をつかふことといへば、一家のことでなしに、新しい衣裳のこと。もはや、良人を滿足させることなど考へもしないで、口先のうまい士官の氣に入ることを考へ、ねえ、奥さん、ロシアの大貴族の良人なり夫人なりが、ドイツの煙草のみや、女工らと一緒にゐるのが體裁のいいものでせうかね？　夜の夜中まで踊り廻つたり、若い男と話をするなんて、聞いたこともない話ですよ！　それも親類の人だといふのならまだしものこと、えたいの知れない赤の他人となのですからね。」

「物いへば唇寒しですが、」とガヴリーラ・アファナシエヴィッチは眉をひそめて言つた、「實をいへば、私もあの夜會といふ奴は性に合ひませんでしてね。若しかすると、醉ひどれに突き當つたり、醉つ拂ひから冗談に飲まされたりしますからね。それに若しかすると、どこかのいたづら者に娘に何か悪ふざけをされる心配もありますしね。何しろ、けふ日の若い者は話にならんほどの、いたづらをやらかしますんで。まあいい例が何ですね、亡くなつたエッグラフ・セルゲイッチ・コルサーコフさんの息子。あの子はこの前の夜會の時、ナターシャのことであんな騒ぎ

をおこして、私もあれには赤面しましたよ。

翌くる日に庭を見てゐると、私の方へまつしぐらに飛んで來る男があるぢやありませんか。私は考へましたね、誰だらう？　アレクサンドル・ダニーロヴィッチ公ではないかしらつて。するとさうではなくて、例のコルサーコフさんの息子なんですよ！　多分、門のところで車をとめることも、玄關の段々まで歩いて來ることも出來なかつたのでせうよ。いやはやどうも！　飛び込んで來ると、三拜九拜したり、お喋りを始めたり、どうにも手がつけられませんでしたよ！　この阿呆のエキーモヴナが、とても可笑しく、あれの眞似をいたしますよ。ついでに、おまへ、舶來猿をやつてお見せ。」

といはれて、阿呆のエキーモヴナは、一つの鉢の蓋をとつて、……まるで帽子を挾むやうに、それを腋に挾み、しかめ顔をしたり、足踏をしたりして、「ムウショ……マムゼリ……アッサムブレーヤ……バルドン」などと口ずさみながら、四方八方へお辭儀をし始めた。客は又しても大喜びで、一同こぞつて、いつまでも大笑ひをしてゐた。

「コルサーコフにそつくりだよ、」と、ルイコフ老公は、やうやく靜まりかけた時に、嬉し涙を拭ひながらいつた、「舊悪ぬぐふべけんや？　ドイツ三界から道化役者になつて、聖なるロシ

アに歸つて來たのは、何もあれが初めてぢやないがな。あんなところへ行つて、ロシアの子供が、何を勉强するつていふんだらう？　變な恰好のお辭儀をすることや、ちんぷんかんぷんの言葉を喋つたり、目上の者をあがめずに、他人の女房を口說くことを習ふだけぢやないかな。外國、（嗚呼！）外國で育つた若い者の中で、一人前になつたのは、陛下の黑ん坊が先づ第一だよ。」

「まあ、公爵」とタチヤナ・アファナシエヴナが言つた、「私は、私はようく近づいて見ましたが、あの面の怖いことつたら？　私はぞつとしましたよ。」

「むろん、それあ、」とガヴリーラ・アファナシエキッチがいつた、「あの男は几帳面で、禮儀正しい人間ですからね。輕薄な奴とは譯が違ひますよ……あれは誰だ、また屋敷うちへ乘り込んで來たのは？　また舶來猿ぢやないか？　お前らは何のつもりでゐるんだ、畜生め！」召使の方を向いて、彼は言葉をつづけた、

「さつさと行つて、ことわれ、そして今後は……」

「お年を召しましたねえ、うは言を仰つしやつて居られるぢやありませんか？」と阿呆のエキーモヴナが遮つた、「それとも、お盲目になつたのですかね。あの樞は天子樣のだに。陛下がおいでなすつたんですよ。」

ガヴリーラ・アファナシエキッチは大急ぎで席を立つた。一同は窓の方へ馳けつけて、實際に大帝が從卒の肩に凭りかかりながら車寄の段々を昇るのを眼にとめた。忽ちに、大へんな騷ぎになつた。主人はピョートルを出迎へに馳け出し、召使たちは、まるで半きちがひになつたやうに、盛んに走り廻り、お客はすつかり畏れをなした。中には一刻も早く拔け出さうと考へる者さへもあつた。折柄、玄關の部屋にピョートルの雷のやうな聲が響き渡つて、あたりはひそまり返り、そこへ、餘りの光榮に怖ぢ氣づいた主人を隨へて、大帝が入御された。

「諸君、御機嫌よう。」とピョートルが愉快さうな顏をしていつた。

一同は最敬禮をした。そのうちに、大帝のすばやい眸は、群がる人々のなかにゐる主人の娘をさがし出した。大帝は娘を召された。娘のナターリヤ・ガブリーロヴナはいとも威勢よく大帝のお傍に近づいたが、耳はおろか、肩までも赧くなつた。

「見る度にきれいになるね、」と大帝は仰せられて、いつものやうに頭に接吻なされ、やがて客たちの方をふり返りながら、「これはこれは、お邪魔をいたしましたね？　お食事はお濟みでしたか？　さあ、またお掛け下すつて。わしには、ガヴリーラ・アファナシエキッチ、茴香酒を一つ。」

主人は勿體ぶつてゐる家令の方へ驅け寄つて、手にしてゐたお盆をうけ取り、自ら黃金の杯に酒をついで、恭しく大帝に捧げた。ピョートルは、さつそく飲み乾して卷麵麭(クレンチリ)を召し上り、又もや來客に食事をつづけるやうにと促された。大帝の陪食といふことに氣がひけて、じつとして居れなかつたちびの女と老女とを殘して、一同はもとの席にかへつた。ピョートルは主人のわきに坐つて、キャベツのスープを所望した。すると大帝の從卒が、象嵌のある木の匙と、みどり色の骨製の柄のついたナイフとフォークを渡した。ピョートルは一度として、自家用のもの以外に、よその食器を用ゐなかつたのである。ほんの一分間ほど前まで、歡談に花を咲かせながら喫してゐた食事が、今は靜寂裡に、仕方なしにつづけられた。主人は光榮と欣びにあふれて、もはや何も食べなかつた。お客たちも禮儀に拘泥して、大帝が、囚はれのスエーデン人を相手に、一七〇一年の役の話をドイツ語でされるのを謹聽してゐた。阿呆のエキーモヴナは幾たびか大帝の質問をうけ、何となく怖ぢ氣づいて、冷やかな返事をした。序でながら、その邊のところを見ると、生れながらの馬鹿でもないらしいのである。やがて遂に食事が終つた。大帝が立ちあがると、つづいて、お客一同もこれに倣つた。

「ガヴリーラ・アファナシエヰッチ、」と大帝は、主人にむかつて仰せられた、「お前と二人

きりで話さねばならんことがある。」

といつて彼は主人の手をとつて、客間に連れ込み、自ら後ろ手にドアをしめた。お客たちはこの思ひがけぬ行幸のことを、ひそひそと語り合つたり、不敬にわたることを氣にかけたりして、暫く食堂に居殘つてゐたが、間もなく、主人に御馳走の禮もいはずに、一人二人と去つて行つた。

義父と娘と姉の三人は、闇のところまで、彼らをこつそりと見送つて行つたのであるが、客がゐなくなつてからも、大帝の出て來られるのを待ちわびながら、やはり食堂に居殘つてゐた。

5

わしはおまへに女房をめとつてやるぞ、
それでなければ粉屋にやらぬ。
——歌劇「粉屋」のアブレシモフ——

半時間ほどするとドアがあいて、ピョートルが出て來た。彼はルイコフ公爵、タチヤナ・アファナシエヴナ、ナターシャなどが三たび敬禮したのに對して威嚴のある會釋を返してから、玄關の部屋へ眞直ぐに進んだ。主人は眞赤な毛皮の外套をかけてやり、欄のところまで見送つたが、上りの段のところで改めて行幸の光榮を感謝した。

ピョートルは立ち去つた。

食堂に歸つて來たガヴリーラ・アファナシエキッチは、かなり心配してゐる樣子であつた。彼は召使たちに、怒氣を含んで、大いそぎにあとを片づけるやうにと命じ、ナターシャを大窓のある自分の明るい部屋へ引きさがらせ、姉と義父とには、是非とも話したいことがあるといつて、

いつも自分が食事のあとで休むことにしてゐる寢室へと導いた。年老いた公爵は櫛の寢臺に横たはり、タチヤナ・アファナシエヴナは足臺を引寄せて、古風な花模樣の緞子を張つた安樂椅子に腰をおろした。ガヴリーラ・アファナシエキッチはドアをすつかり閉めて、寢臺のルイコフ公の足もとに腰をかけると、聲ひくく次のやうな話をし始めた。

「こちらへ陛下がおいでになられたのは、曰くがあつてのことです。私はどんなことをお話しなすつたか察しがつきますかしら？」

「まあ、分る筈はないよ、お前！」とタチヤナ・アファナシエヴナがいつた。

「大帝は太守でも勤めるやうにとの御内命ではなかつたのかい？」と義父がいつた、「もうよい頃ではないか！　それとも全權公使かな？　え、だつて祕書役だけではなく、ずゐぶん、位の高い人でも外國へ遣はされるのだから。」

「いいえ、」と婿は眉をひそめて「私はもう微の生えた人間です。今さら宮仕へでもありますまいよ。なるほど正教のロシア貴族が、どうかすると青二才だの、せんべい屋だの、回教徒ほどの値打もない今時ですけれど。しかし、これはまた別な話です。」

「では一體何です？」とタチヤナ・アファナシエヴナが口を出した、「陛下があんなに永いそ

と、お前にお言葉を賜はつたのは？　若しやお前の身に、何か不幸なことでも起つたのでは？あ
あ、どうか、そんなことでなければよいが！」
「不幸なこと、といふほどでもありませんが、正直にいふと、考へさせられたことだつたので
す。」
「といふと、何です？　どうしたといふんです。」
「ナターシャのことなんですけれどね。陛下はあれの嫁入りのことで、わざわざ行幸あそばさ
れたのです。」
「まあよかつた！」といつて、タチヤナ・アファナシエヴナは十字を切つた、「昔から嫁入り
先は仲人次第といひますもの。何て仕合せなことでせう。で、陛下は誰にめあはせよつて仰せな
の？」
「ふむ？」とガヴリーラ・アファナシエヰッチは咳拂ひをして、「その誰にが、抑々の問題な
んですよ！」
「一體、誰にめあはせよとの仰せなんだい？」と、もうそろそろ居睡りをはじめたルイコフ公
爵が繰り返した。

「當てて御覽なさい。」
「まあ、お前」と老婦人が答へた、「どうして私たちに當てられるものかね？　宮中には、む
こがねも山ほどあるし、あのナターシャなら、誰も不足をいふものも居るまいしね。ドルゴルゥ
キイでもあるのかい？」
「いいえ、ドルゴルゥキイではありません。」
「それはよかつた、横柄な人だものね。さうすると、シェインかい？　それともトロエクーロ
フ？」
「いいえ、どつちでもありません。」
「さう、あの人たちにも感心しないわ。氣まぐれで、それに、あんまりドイツかぶれをしてゐ
てね。では、ミロスラフスキイなの？」
「いえ、あれでもありません。」
「やれやれ、あの人はお金持だけれど、少し足りないからね。それでは、エレッキイなの？
リヴォフなの？　それとも、ラグンスキイ？　もうもう、好きにおし、とんと思ひつけやしな
い。ほんとに、陛下は誰にめあはせよと仰つしやつたの？」

「あの黒ん坊のイブラヒムにですよ。」

老婆はあつといつて、思はず手をたたいた。ルイコフ公爵は、クッションから首をもちあげると、驚いて鸚鵡がへしにささやいた、

「あの黒ん坊？」

「まあ、お前！」と老婆は涙聲で言つた。「自分の生みの娘を臺なしにするものぢやないよ。あのナターシャをあんな鬼みたいな黒ん坊の爪になどかけさせるもんではありませんよ。」

「だからといつて、」と、ガヴリーラ・アファナシエキッチが言葉を返した、「どうして御辭退が申されませう。その代りには、私はじめ一門の者に對して、御恩寵を垂れ給ふとのお言葉ですのに。」

「どうして、そんな、」と老公は、すつかり睡氣も覺めてしまつて、喚くやうにいつた、「あの可哀いい孫のナターシャを、金で買はれた黒ん坊のところへなど遣れるものか。」

「しかし、あれは賤しい生れではありません。」とガブリーラ・アファナシエキッチがいつた、「黒人國のサルタンの嫡子ですよ。それを邪教徒が俘虜にして、君子坦丁堡で人に賣つたのを、ロシアの公使が救ひ出して大帝に獻上したのです。あれの兄といふのが、何でも莫大な身代

金を持つて遥々とロシアへやつて來たさうですが……」

「そんなボワ・コロレキッチやエルスラン・ラザレキッチの昔話はもう澤山だよ。」

「ねえ、ガヴリーラ・アファナシエキッチ、」と老婆が遮つた。「それよりはお前、陛下にはどう御返事を申し上げたのだい？」

「御稜威のほどこそ畏き極み、臣下として、この務めはただに從ひまつるのみ——と。」

そのとき、ドアの外で物音がした。ガヴリーラ・アファナシエキッチは進み寄つて、それをあけようとしたが、何かがつかへてゐるやうな手應へを感じた。ぐつと力を入れて押すと、ドアがあいて、血にまみれた床のうへに、ナターシャが氣を失つて倒れてゐた。

大帝が彼女の父親と共に一室に閉ぢこもられたとき、一種の豫感によつて、彼女は何かしら自分の一身に關したことのやうに思つたのであつた。やがて、父親が、伯母や叔父と相談することがあるからと言つて、彼女を引きさがらせると、女らしい好奇心を抑へることが出來ずに、彼女はそつと中の間づたひに父の寢室の戸口へ忍び寄つて、あの怖しい話の全部を立ち聽きしてしまつたのである。かくて、父の最後の言葉を耳にすると、哀れな少女は、すつかり意識を失ひ、倒れる拍子に自分の嫁入道具の入つた鐵張りの長櫃に頭を打ちつけた。

「あの黒ん坊のイブラヒムにですよ。」

老婆はあつといつて、思はず手をたたいた。ルイコフ公爵は、クッションから首をもちあげると、驚いて鸚鵡がへしにささやいた、

「あの黒ん坊？」

「まあ、お前！」と老婆は涙聲で言つた。「自分の生みの娘を臺なしにするものぢやないよ。あのナターシャをあんな鬼みたいな黒ん坊の爪になどかけさせるもんではありませんよ。」

「だからといつて、」と、ガヴリーラ・アファナシエヰッチが言葉を返した、「どうして御辭退が申されませう。その代りには、私はじめ一門の者に對して、御恩寵を垂れ給ふとのお言葉ですのに。」

「どうして、そんな、」と老公は、すつかり睡氣も覺めてしまつて、喚くやうにいつた、「あの可哀いい孫のナターシャを、金で買はれた黒ん坊のところへなど遣れるものか。」

「しかし、あれは賤しい生れではありません。」とガブリーラ・アファナシエヰッチがいつた、「黒人國のサルタンの嫡子ですよ。それを邪教徒が俘虜にして、君子坦丁堡で人に賣つたのを、ロシアの公使が救ひ出して大帝に獻上したのです。あれの兄といふのが、何でも莫大な身代

金を持つて遥々とロシアへやつて來たさうですが……」

「そんなボワ・コロレヰッチやエルスラン・ラザレヰッチの昔話はもう澤山だよ。」

「ねえ、ガヴリーラ・アファナシエヰッチ、」と老婆が遮つた。「それよりはお前、陛下にはどう御返事を申し上げたのだい？」

「御稜威のほどこそ畏き極み、臣下として、この務めはただに從ひまつるのみ——と。」

そのとき、ドアの外で物音がした。ガヴリーラ・アファナシエヰッチは進み寄つて、それをあけようとしたが、何かがつかへてゐるやうな手應へを感じた。ぐつと力を入れて押すと、ドアがあいて、血にまみれた床のうへに、ナターシャが氣を失つて倒れてゐた。

大帝が彼女の父親と共に一室に閉ぢこもられたとき、一種の豫感によつて、彼女は何かしら自分の一身に關したことのやうに思つたのであつた。やがて、父親が、伯母や叔父と相談することがあるからと言つて、彼女を引きさがらせると、女らしい好奇心を抑へることが出來ずに、彼女はそつと中の間づたひに父の寢室の戸口へ忍び寄つて、あの怖しい話の全部を立ち聽きしてしまつたのである。かくて、父の最後の言葉を耳にすると、哀れな少女は、すつかり意識を失ひ、倒れる拍子に自分の嫁入道具の入つた鐵張りの長櫃に頭を打ちつけた。

人々は馳けつけて、ナターシャを抱きあげると、彼女の部屋へ運んで、寢臺のうへに寢かしつけた。

暫くすると、彼女は意識を取り戻し眼をあけたが、父の顏も、伯母の顏も見わけることが出來なかつた。彼女は激しい熱を出して、うは言の中で大帝の黑奴のことや婚禮のことなどを口走つてゐたが、いきなり訴へるやうに金切り聲で叫んだ、

「ワレリヤン！　早く助けて……ほら、そこにあの人たちが、あの人たちが……」

タチヤナ・アファナシエヴナはおろおろしながら弟の顏を見やつたが、彼は蒼ざめて唇を嚙んだまま、無言のうちに部屋を出て行つた。階段を上ることが出來ずに、階下で待つてゐた老公爵のところへ、彼は戻つて來た。

「ナターシャの樣子はどう？」と、義父が訊ねた。

「よくないです、」と、悲嘆に暮れた父が答へた。「私の思つてゐた以上に、いけないです。うは言に、ワレリヤンの名を呼んでゐます。」

「そのワレリヤンといふのは何者だね？」と不安さうに老人が訊ねた、「まさか、お前がうちへ連れこんで來て養つてゐた、あの近衞兵のみなし兒のことぢやあるまいな？」

「實はあれなのです。面目次第もありません。」と、ガヴリーラ・アファナシエヽキッチが答へた、「例の謀叛さわぎのとき、あれの父親に危いところを助けられたのが因緣で、ついあんな忌忌しい奴を引き取るやうな羽目になつてしまつたのです。二年前に、當人の願ひで軍隊へ入れてやりましたところ、いよいよ出立といふ時になつて、ナターシャがあれとの別れを惜しんで泣きましたし、あれもまるで化石したみたいに篠立になつて居りました。どうも變だと思ひましたので、そのことは姉にも話しておきましたが、それからといふもの、ナターシャは一言もあれのことは申しませんし、またあれの消息もばつたり杜絕えてしまひましたので、娘も忘れてくれたものと思ひ込んで居りましたら、やはりさうではなかつたので、しかし、今はもう決まつたことです。娘は黑ん坊に嫁がせませう。」

ルイコフ公は抗辯しようとはしなかつた。して見たところで、仕甲斐がなかつたであらう。彼は家に歸つて行つた。タチヤナ・アファナシエヴナはナターシャの枕邊を離れなかつた。ガヴリーラ・アファナシエヽキッチは醫師を迎へにやつておいて、自室に閉ぢ籠つてしまつた。やがて、邸內はひつそり靜まり返つて、憂色にとざされた。

この意外な緣談には、少くともガヴリーラ・アファナシエヽキッチが慴いたと同じ位には、イブ

ラヒムも愕いた。そのいきさつは、かうである。

ピョートル大帝はイブラヒムを相手に書類を調べながら、かう言はれた。

「見うけたところ、どうもお前は鬱ぎ込んでゐるやうだな。何が不足なのか、あけすけに話して見よ。」

イブラヒムは、自分の身の上に滿足してゐて、これ以上に望むところはないと斷言した。

「よし、」と大帝は仰せられた、「若しも、別にこれといふ仔細もなくて、そんなに浮かぬ顏をしてゐるのならば、見事にこのわしが癒してつかはさう。」

やがて仕事が片づいたとき、ピョートル大帝はイブラヒムにかう訊ねられた。

「この間の夜會で、お前が一しよにミニュエットを踊つた娘はどうだ。氣に入つたか？」

「はい、陛下、あれは大へん可愛らしい女で、見たところ淑やかで、氣立てのやさしい方だと思ひました。」

「さうか、では、わしがお前を、あの子と、もつと懇意にしてつかはさう。どうだ、あれを妻に迎へたいとは思はぬか？」

「この私がでございますか、陛下？……」

「まあ聽け、イブラヒム。お前は門地も同族もなく、よるべない人間で、このわしを除けたら、あとはみんな赤の他人だ。今日にもわしが死んで見よ。明日からのお前は一體どうなることだ。いとしい黒ん坊！ わしの眼の黒いうちに、何とか身を固めて、新しい身寄りをこしらへておくことだ。それには、ロシアの大貴族と緣組みをしておくのが何よりだ。」

「陛下、わたくしは陛下の深き御庇護と御愛寵を辱うして、この上もない果報者でございます。わたくしは決して鴻恩ある陛下の御あとまで生き長らへたくはございません——それ以外には、何の願ひもございませぬ。それに致しましても、たとひ結婚いたしたいと存じたところで、先樣の娘なり親族なりが、承服いたすでございませうか？ このわたくしの容貌では——」

「容貌だと？ 何を詰らんことをいふ！ どうしてお前が立派な若者でないといふのだ？ 未婚の娘は兩親の言ひなりになるものだ。して、このわしが、親しく仲人を買つて出るといふのに、あの親父がガヴリーラ・ルジェスキイめ、何と言ふかな？」

かう言つて、大帝は樞の支度を命ずると、深い物思ひに沈むイブラヒムをあとに、立ち去られた。

「妻を迎へる？」と、アフリカ人は考へた、「どうしてそれが惡からう？ 十五度下に生を亨

けたといふ、ただそれだけの理由で、人生無上の悦樂を知らず、至聖至高の人倫を踏まずに、孤獨の生涯を送らねばならぬといふのか？　愛される望みがないといふのか？　何の子供じみた世迷言だ！　それならば愛される自信があるといふのか？　女の淺はかな心に、そんな愛が當てに出來るかしら？　なまめかしい迷夢などは、さらりと思ひ切つて、もつと實質的な、別の蠱惑に身を委ねたおれではなかつたか。それにしても、陛下の仰せも御尤もだ——おれは自分の行く末のことを、とくと考へなければならぬ。ルジェフスキイ家の娘と結婚すれば、おれも光榮あるロシア貴族の一味となつて、この新しい祖國において、渡り者ではなくなるのだ。おれは妻に愛など求めまい。妻の貞節だけに滿足して、常に變らぬ優しさと、信頼と、謙讓とによつて、せめて友情だけでも贏ち得よう。」

イブラヒムは、いつもの習慣どほりに仕事に沒頭しようと思つたが、つぎからつぎと氣が散るばかりであつた。そこで、書類はそのままにしておいて、ネヴァ河の岸邊をぶらついた。いきなり、ピョートルの聲を耳にして振り返ると、大帝は橇を乘りすてて、機嫌のよい顏をしながら、彼のあとからつけて來るところであつた。

「何もかも濟んだぞ？」と、ピョートル大帝は彼の腕をかかへて仰せられた、「わしはお前の

仲人役を果して來たぞ。明日になつたら、さつそく義父のところへ行つて來るがいい。ただ氣をつけろよ、そして奴の大貴族としての自尊心をおだててやれ。それには先づ、門のところで橇を乘り棄てて、庭を徒歩で突き進むのだ。會つたら、奴の勳功と、高い門地を褒め立てることだ。さうすれば、奴め、お前にすつかり惚れ込んでしまふにきまつてゐる。ところで、今は、」と、大帝は太い杖を振りながら、言葉を續けた、「あの横着なダニールイチのところへわしを案内しろ、ひとつ、あれのいたづらを取つちめてやらなければならんから。」

イブラヒムは自分に對する大帝の慈父にもまさる心やりに、衷心からのお禮を言上してから、メンシコフ公爵の壯麗な館まで大帝を案内しておいて、自分は家へ歸つた。

6

硝子の聖龕のまへには、靜かに燈明がともつて、家代々に傳はる聖像の金銀の緣飾りがきらめいてゐた。帷をおろした寢室と、藥瓶をのせた小卓子とが、ゆらめく燈明の光りに、ほんのりと照らされてゐた。煖爐の傍には一人のはした女が坐つて、紡車を繰つてゐるが、その紡錘のうなる微かな音のみが、部屋の靜寂を破つてゐる。

「そこにゐるのは、だあれ？」と、弱々しい聲がきこえる。さつそく女中は寢室に近づいて、靜かに帷をあけた。

「もう直きに夜が明けるの？」とナターシャが訊いた。

「もう、ちやうどお午ごろでございますよ。」と女中が答へた。

「まあ、でも、どうしてこんなに暗いの？」

「お窓が閉めてございますの、お孃さま。」

「なら、早く着がへの用意をしておくれ。」

「いけません、お孃樣、お醫者樣がよろしいと仰つしやいませんもの。」

「あたし、病氣なの？　いつから？」

「もう二週間にもなりますよ。」

「ほんと？　でも、わたし、ゆうべ、お床についたやうな氣がするのだけれど……」

ナターシャは口を噤んだ。彼女は何か自分の身にあつたやうであるが、あれは何だつたかしらと、散り散りになつた思ひを一心に整へようとしたが、それを想ひ起すことが出來なかつた。女中は彼女の前に佇んだまま、いひつけを待つてゐた。

そのとき、階下で、鈍い物音がした。

「あれは、なあに？」と病人が訊ねた。

「皆樣のお食事が濟んだのでございます。」と女中が答へた、「食卓をお立ちになるところでございますよ。追つつけ、タチヤナ・アファナシエヴナさまが、こちらへお見えになりませう。」

ナターシャは嬉しさうな樣子をして力ない手を振つて見せた。

女中は帷をおろして、再び紡車のわきへ坐つた。

數分ののち、扉のかげから、地味なリボンをつけた白い寬やかな頭巾をかぶつた頭が覗いて、小聲でかう訊ねた、

「ナターシャはどんな鹽梅だね？」

「伯母さま、御機嫌よう」と病人が低い聲でいつた。

タチヤナ・アファナシエヴナは寢室へ駈け寄つた。

「お嬢樣はお氣がおつきになりましたよ。」と女中は用心ぶかく肱掛椅子を押子を押しすすめながら言つた。老婆は涙をうかべて、わきへ腰をおろした。

それにつづいて、學者らしい髮に、黑の長衣(カフタン)をまとつたドイツ人の醫師が入つて來て、ナターシャの脈をとつて見て、もはや危險は去つたといふことを、先づラテン語でいつてから、つぎにロシア語で傳へた。紙とインク壺を要求して、彼が新しい處方箋を書いて立ち去るとタチヤナ、アファナシエヴナも立ちあがつて、もう一度姪に接吻して置いて、さつそく階下のガヴリーラ・アファナシエヴキッチの許へ、この吉報を傳へに行つた。

客間では、軍服に劍をつけた大帝の黑奴が、軍帽を手に持つたまま、慇懃にガヴリーラ・アファナシエヴキッチと話し合つてゐた。コルサーコフは、やはらかい長椅子に打ち寛いで、ぼんやりと二人の話に耳を藉しながら、主人祕藏のボルゾイ犬をからかつてゐたが、やがてそれにも厭いて、退屈な時の凌ぎ場所にしてある姿見へと近づいた。すると、鏡の中に、タチヤナ・アファナ

シエヴナがドアのかげに隱れて、弟の方へそつと何かの合圖をしてゐる姿が映つた。

「呼んでらつしやいますよ、ガヴリーラ・アファナシエヴキッチ」とコルサーコフは主人の方を振り向いて、イブラヒムの話を遮つて言つた。ガヴリーラ・アファナシエヴキッチは直ぐさま姉の方へ行つて後ろ手にドアをしめた。

「君の辛抱づよいのには、たまげるよ」とコルサーコフがイブラヒムにむかつて言つた、「まるまる一時間も、ルイコフ家やルジェフスキイ家の古い門閥についての夢物語を長々と聽かされて、おまけにさも殊勝げな合槌を打つと來てるんだからなあ！　これが若し君でなくて僕だつたら、あんな老いぼれの喋り屋もその一族も、それから勿體ぶつた假病か何か使つてゐるやつ、――いや、une petite santé(ユヌ・プチト・サンテ)（御病身）のナタリヤ姫も引つくるめて、j'aurais plante(ジョーレ・プランチ)（唾を吐いてやる）だね。さあ、良心にかけて白狀したまへ、君は本當にあの可愛らしい mijauree(ミジョレ)（氣取つた女）に首つたけなのかい？」

「いや」とイブラヒムが答へた、「僕はむろん一時の情熱に驅られて結婚するつもりぢやなくつて、よくよく考へてのことなんだ。それもあの女(ひと)が、どうしても厭やだと言はなかつたらだけど。」

「ねえ、イブラヒム、」とコルサーコフがいつた。「せめて一度だけでも僕の忠告を聽き給へ。かう見えても、僕は相當に思慮分別があるんだぜ。そんな氣まぐれな考へは棄てて、結婚なんか止したまへ。僕は君の許嫁が、何ら君に對して好意をもつてないことを、ちやんと睨んでるんだよ。よくあるやつで、碌なことは起らんよ。例へばさ、かくいふ僕にしたところで、成程まんざら見られない男ではないんだけれど、それにしても、決して僕にひけを取らないやうな連中の女房を寢取つたこともずゐぶんあるんだぜ、君にしてもさ……僕たちのパリーの友人D＊＊伯爵のことを覺えてるだらう？　女の貞操をあてにすることは出來ないよ。ただ、さういふことを平氣で見てゐられる者だけが仕合せといふものさ。ところが君はといへばだ！……火のやうで、しかも陰氣な、疑ひ深い氣性と、ぺちやんこ鼻に、ふくれあがつた唇、それに、もじやもじやした頭をしてゐるくせに、それでゐて結婚生活のあらゆる危險に身をさらすといふのかい？……」

「親切な御忠告はありがたう。」と冷やかにイブラヒムが遮つた、「だが、かういふ諺がある よ——他人の子供はゆすぶつてやるには及ばないつてね……。」

「氣をつけ給へ、イブラヒム」とコルサーコフは笑ひながら應酬した、「後になつて、その諺を文字通りの意味で實證するやうな羽目にならないことだて。」

しかし、つぎの部屋の話聲が、大きく聞え出した。

「それはおまへ、あの子を殺してしまふも同じですよ、」と老婆がいつた、「あんな面相で、とてもあの子には辛抱が出來ないよ」

「けど、御自分でも考へてごらんなさい。」と、弟が强情に言ひ張つた、「もう、これで二週間も花聟として通つて來てゐながら、今もつて一度も花嫁の顏を見てゐないんですからね。しまひには、あれの病氣が實は假病で、われわれが何とかして言ひ逃れをしたいばかりに、ずるずると遷延してゐるのだと見做されても仕方ありませんよ。それに、大帝が何と仰せられることでせう？　もう三度も、ナターリヤの容態をたづねに勅使を御差遣あそばされたではありませんか。姉上が何と仰つしやつても、私は陛下に楯つく氣はありませんから。」

「ああ、ほんたうにどうしよう！」と、タチヤナ・アファナシエヴナはいふのであつた、「可哀さうに、あの子はどうなることだらう！　それなら、せめてわたしが、訪ねて來てゐることを、あの子に覺悟させませう。」

ガヴリーラ・アファナシエヴィッチはそれを聽きいれて、再び客間に引き返した。

「やれやれ！」と、彼はイブラヒムにむかつて言つた。「やつと危險は去りました。ナターリ

ャはよほど氣分がよい樣子です。それで、若し大事なお客のコルサーコフさんをただ一人ここに置き去りにしても、餘り失禮でなかつたら、あんたを二階へ御案内して一目あなたの花嫁に會つていただきたう存じますが。」

コルサーコフは先づガヴリーラ・アファナシエヰッチに祝辭を述べてから、そんな遠慮は御無用にと希ひ、もう失禮しなければならないのだからと言つて、主人の見送りも强ひて斷りながら、玄關の部屋へと走り出た。

一方、タチヤナ・アファナシエヴナは、病人にあの怖しい訪客を迎へる覺悟をさせるために、姪の許へ急いだ。彼女は部屋に入ると、溜息をつきながら、寢臺の傍に坐つて、ナターシャの手をとつたが、彼女がまだ何ひとつ言ひ出さないうちに、早くもドアがあいた。

「どなたが見えて？」とナターシャが訊ねた。

老婆ははつと息をつまらせた。ガヴリーラ・アファナシエヰッチは帷をあげて、冷やかに病人を一瞥すると氣分はどうかと訊ねた。病人は父にむかつて笑顏を見せようとしたが、それが出來なかつた。父のいかめしい眸に脅やかされて、彼女の胸はさつと不安にとざされた。そのとき彼女は、誰か自分の枕邊に佇んでゐるやうに感じた。やつと首をあげて見ると、それは思ひもかけ

ぬ大帝の黑奴であつた。

ここで彼女は一切のことを胸に想ひうかべた。すると、あらゆる怖しい未來が、まざまざと彼女の眼の前にうかんだ。

しかし、憔悴した肉體には、あらはな激動は表はれなかつた。ナターシャは再び頭を枕におとして、眼を瞑ぢた……

彼女の心臟は病的に鼓動した。タチヤナ・アファナシエヰッチが弟に目配せして、病人は眠りかかつてゐるのだと知らせた。そこで、一同は部屋を出て、一人だけ殘つた女中が再び紡車にむかつて坐つた。

哀れな美女はやがて眼をあけたが、自分のまはりに、もう誰もゐないことを知ると、女中を傍へ呼んで、小をんなを迎へにやつた。が、その瞬間に、まるまるした年寄の赤ん坊が毬のやうに彼女の寢臺の傍へ轉び寄つた。つばくら（小をんなには、さういふ綽名がついてゐた）は、ガヴリーラ・アファナシエヰッチとイブラヒムの後から、短い足で一所懸命に階段を駈けあがると、女性に通有な好奇心に背かず、ドアのかげに身をひそめてゐたのである。ナターシャは小をんなの姿を認めると、女中を遠ざけた。すると、小をんなは寢臺のわきのベンチに腰をおろした。

いつの代にも、このやうな小さな體にこれほど多く精神的なエネルギイが包まれてゐた例しはない。彼女はあらゆることに喙を容れ、何でも知つてゐて、彼女がおせつかいをしない事はなかつたのである。

彼女は抜け目のない縱横の機智を働らかせて、主筋の寵愛を贏ち得る一方、そのわがまま勝手な支配をうけてゐる召使一同の憎惡を買つてゐた。ガヴリーラ・アファナシエヰッチは彼女の告げ口も愚痴も、くだらない願ひごとも一々とり上げてゐた。タチヤナ・アファナシエヴナは一にも二にも彼女の意見を糺し、彼女の助言のままに動き、ナターシャはナターシャで彼女に對して限りのない愛着を寄せ、十六娘のどんな考へをもどんな心の動きをも、あますところなく彼女に打ち明けてゐた。

「知つてるの、つばくらさん、」と彼女はいつた。

「お父さまは、あたしを黑ん坊のところへお嫁にやるんですつて。」

小をんなは深いため息をついた。そして、皺だらけの顏が、一そう皺だらけになつた。

「ほんとに、もうどうすることも出來ないかしら？」と、ナターシャはつづけた。「お父さまは、あたしを可哀さうだとはお思ひにならないのかしら？」

ちびの女は小さな頭巾をかぶつた首を振つた。

「お祖父さまか伯母さまかが、あたしの味方になつて下さらないかしら？」

「駄目でございますよ、お嬢さま。あなたの御病氣の間に、あの黑ん坊が皆樣をすつかりたぶらかしてしまひましたもの。殿樣はもうあれに夢中になつておいでですし、公爵もあの男のことばかり仰つしやつて居られますよ。タチヤナ・アファナシエヴナさまは、かう仰つしやいますのですよ。あれが黑ん坊なのは殘念だけれど、あれ以上に立派な聟がねを望んでは罰が當る、なんて。」

「まあ、どうしよう！　まあ、どうしよう！」と哀れなナターシャは呻き聲を洩らした。

「そんなにお嘆きなさいますな、お嬢さま」と、彼女の弱々しい手に接吻しながら、小をんながいつた。「たとひ黑ん坊のところへお片づき遊ばしても、やつぱりお氣に召すとほりになりますよ。當節は、もう昔とは違つて、旦那方が奥方を閉ぢこめてお置きになるやうなことはございませんもの。それにあの黑ん坊はお金持だといふ話ですし、きつと、何不足なく榮耀榮華にお暮しになることが出來ませうよ。」

「可哀さうなワレリヤン！」とナターシャは呟いたが、その聲があまり低かつたので、言葉はよく聞きとれなかつた。しかし、小をんなには、その邊のところの察しがついた。

「それそれ、それでございますよ、お嬢さま」と、仔細らしく小をんなは聲をひそめて囁いた。「あの近衛兵のみなし子のことを、それほどにお思ひ詰めにならなければ、いくら熱がお高くても、まさか譫言にまで仰つしやる筈はなく、お父様のお腹立ちもなかつたでせうに。」

「何だつて？」と、ナターシャはびつくりして言つた、「あたしがワレリヤンのことを譫言にいつたんだつて？　それをお父様がお聞きになつたの？　そしてお腹立ちになつたの？」

「あれが何より拙かつたのですよ。」と小びとが答へた。「今となつては黒ん坊のところへお嫁にやらないで下さいなどと、お父様にお願ひを遊ばせば、きつとそれはワレリヤンのせゐだとおとりになりますよ。どうも仕様がございませんから、お父様の思召どほりになさいませ。どうせ成るやうにしか成りませんもの。」

ナターシャはもはや一ことも言葉を返さなかつた。自分の心に祕めてゐたことが、父親に知れてしまつたのだといふ氣持は、彼女の考へに大きな影響を與へた。彼女に殘された望みといへば、ただ一つであつた。

「この厭はしい結婚をするに先だつて、死んでしまはう。」この考へが彼女を慰めた。彼女は力なく、傷ましい魂をもつて自身の運命に屈服した。

7

ガウリーラ・アファナシエヰッチ邸の玄關の右手に、小さな窓の一つついた小房がある。その中に、粗羅紗の掛夜具に蔽はれた質素な寢臺があつた。寢臺の前には樅材の小卓が置かれて、そのうへには獸脂蠟燭がともされ、開けたままの樂譜が載つてゐた。壁には古びた青い軍服と、それと同じ時代物の三角帽がかけてあつて、その上のところには、馬上に跨がつたカルル十二世をあらはした安物の版畫が、三本の鋲でとめてある。このつつましやかな住ゐの中で、フリュートの音が聞えてゐた。小房の孤獨な住人である俘虜の舞踏教師が、ナイト・キャップに南京織の寛衣姿で、古めかしいスエーデンマーチを吹きながら、冬の夜のつれづれを慰めてゐるのである。まる二時間を、さうした練習に捧げると、そのスエーデン人はフリュートを解いて函の中にしまひ、着物を脱ぎにかかつた。(17)

このとき、扉の鏁があがつて、軍服を着たきれいな、背の高い青年が彼の部屋へ入つて來た。スエーデン人はおどろいて立ちあがつた。

「グスタフ・アダムィチ、あんたは僕を知らない。」と若い訪問客は感激に充ちたやうな聲で

いつた、「あんたがスエーデン式の操方を教へながら、おもちやの大砲を射つて、この部屋に危ふく火事を起さうとした時の子供を、覺えていらつしやらない。」

グスタフ・アダムィチは、穴のあくほど相手をよく見つめた……

「えええ、」と遂に青年を抱擁しながら彼は叫んだ。

「御機嫌(18)よう、まあ、あんたが、さうなん。さあさ、坐つて。お坊ちやんお話しましよ」(19)

……

註1　スペイン戰爭　イスパニヤ王位繼承戰役のこと。イスパニヤ王位繼承問題についてルイ十四世がドイツ皇帝なるハプスブルグ家と權利を爭つた事に起因する。(一七〇一——一二)

註2　パレ・ロワイヤル　オルレアン公の館。

註3　ロー　一六七一——一七二九。スコットランドの財政家。ルイ十四世の殘後、フランス財政の混亂を救はんとして、時の攝政に獻策して、銀行を設立す。獨占事業として成績見るべきものあり、更に大藏卿として、ミシシッピ會社を設立。また殖民地貿易の權利を株式投機の目的としたが、惡弊を生じて、ヨーロッパの財界を混亂せしめ、つひに逃亡のやむなきに至つた。

註4　カーチエンカ　エカテリナの愛稱

註5　エカテリナ　ピヨートル一世（大帝）の皇后。もとリトアニヤの農夫の女であつたが、北方戰爭中に捕虜となり、ピヨートルに知られ、一七一一年に正式に皇后となつた。一七二五年ピヨートルの殘後は自ら獨裁權を振つて、人頭稅の輕減、アカデミイの創設など見るべきものがあつた。後にこれをエカテリナ一世と稱した（一六八四——一七二七）

註6　オラニエンバウム　ペテルブルグの西方三十粁餘、フインランド灣に面した町。一七一四

年に離宮がつくられた。

註7　ポルタヴァの役　南ロシアのポルタヴァの近くで、スエーデンのカルル十二世の軍を破つた。一七〇九年のことである。

註8　メンシコフ公　一六七三――一七二九。貧家に生れて、ピョートル大帝の氣に入り信任あつく、帝の西歐旅行に隨伴し、ポルタヴァの役の大勝ののち元帥となる。大帝の死後はエカテリナ一世のために力を致し、更にその死後は幼王ピョートルを擁立したが數ケ月にして失脚、シベリヤに追放された。

註9　ヤーコフ・ドルゴルウキイ公　一六三九――一七二〇。リューリック以來の名家に生れ、幾多の戰功あり。ピョートル大帝の代には新しき國家の計畫に參與して、盡瘁するところ少からず。

註10　プリュース　一六七〇――一七三〇。碩學の譽れ高く、ロシア最初の曆を編み、地圖をつくり、その他學術に多大の貢献をした。

註11　キューヘルベッケル　一七九七――一八四六。ドイツ系ロシア人。詩人にして評論家。プウシキンの親友。

註12　シェレメンチェフ　一六五二――一七九三。ポルタヴァ役の勇將。

註13　マフ　圓筒狀に毛皮をまるめて、手をあたためるもの。

註14　大鷲の杯　ピョートル大帝が、側近の者を懲罰する時は、大きな鷲のしるしのついた杯で、强烈な酒をあふらせた。

註15　マルヴァシア酒　スペイン、ギリシアに產する强烈な葡萄酒。

註16　せんべい屋　メンシコフ公の前身を諷刺す。

註17　トマシェスキイが校訂した最近のソヴェト本以外は、ここで終つてゐる。卽ち、これからあとは新しく、最初のプーシキンの原稿その他を調査のうへ、ソヴェト版の定本に初めて加へられたものである。

註18　スエーデン人の甚しい訛りの言葉を示す。

註19　ここで未完のまゝ切れてゐる。

葬

儀

屋

目ごとに眼に見えずや
老いてゆく天つちの白髪、柩のかずかず？
デルジャーヴイン

葬儀屋アドリアン・プローホロフのあとに殘つてゐた家財道具は葬儀用の馬車に積み込まれて、やせこけた二頭の馬が四回目にバースマンナヤ通りからニキートスカヤ通りにのそのそと曳かれて行つた。葬儀屋は家を擧げてここに引き移つたのである。店に戸締りをすると、彼は門口に賣又貸家といふ貼札をして、新しい家をさして歩いて行つた。かなり久しい間、想像をたくましうせしめてゐたが、つひにこの度、相當の値段で彼の手に入つた黄いろな小さい家に近づきながら、年老いた葬儀屋は自分の心が一向よろこんでゐないのを感じて、今更ながら驚いた。親しみのない闇をまたいで、今度の新しい家の中が雜然としてゐるのを見ると、彼はあの十八年の間、いつも實に整然としてゐた元の古ぼけたあばら家を思ひ出して溜息をついた。彼は二人の娘

と家に使つてゐる女が、ぐづぐづしてゐるといつて叱り始めたが、やがて自分でも手傳ひにとりかかつた。

間もなく片がついた。神棚には聖像が入り、戸棚には食器類が置かれ、卓子や長椅子や寢臺は奥の部屋のそれぞれ定まつた場所に据ゑられた。臺所と客間には主人の製作にかかる凡ゆる色彩、あらゆる大きさの柩、それに服喪の帽子とか、外套とか炬火とかの棚が取りつけられた。

門のうへには肥つたキーピッドが炬火を逆手に持つてゐるところを描いて、その下に「白木及び色塗の柩販賣並びに張付。賃貸も仕るべく、古物の修繕も致すべく候」といふ文句を書いた看板が掲げられた。娘たちは自分の部屋へと引きさがつた。アドリンは、自分の住居を見まはつて、窓ぎはに腰をおろし、サモワルの用意を言ひつけた。

教養ある讀者はシェークスピヤといひ、ヲールター・スコットといひ、共に墓掘り人夫を陽氣で剽輕な人間として表はしてゐることをよく御存じであらうが、これはかやうな對照によつて、われわれの想像力を一そう強く刺戟せんがためである。

眞理を尊ぶ以上は、われわれはこの連中の前例を踏むわけには行かないが、わが國の葬儀屋の性質が陰氣なその商賣に全く打つてつけだといふことは是非とも認めなければならない。アドリ

アン・ブローホロフは不斷は氣むづかしい顏をして、物思はしさうにしてゐた。彼はただ娘たちがぼんやりと、することもなしに窓から道ゆく人を眺めてゐるのを見つけては小言をいつたり、或ひは不幸（尤も時によつて幸福なこともある）に遭つて、彼の作つたものを必要とする者に途方もない高値を吹つかけたりする時のほかは、大てい默りこくつてゐた。

さて、アドリアンは窓ぎはに坐つて、七杯目のお茶を飲みながら、いつものやうに物悲しい思案にふけつてゐた。彼は一週間まへ、退聯旅團長の葬儀のあつた時、丁度、城門のところで出遭つた豪雨のことを考へてゐた。外套がたくさん、雨のために縮んでしまひ、たくさん帽子がまたそつくり反つてしまつたのである。彼は避けることの能きない入費を豫想して見た。といふのは昔からの葬儀衣裳類の在庫品が今はいとも哀れな狀態に陷つたからである。彼はこの損失を、すでに一年近くも死にかかつてゐる年老いた女の商人トリューヒナの葬式によつて償ひたいものだと考へてゐた。けれどもトリューヒナはラズグリヤイ街で死にかかつてゐたので、遺族たちが、かねての約束にもかかはらず、こんなに遠く離れたところへ彼を迎へによこすのを億劫がつて、最寄りの請負人に掛合はないだらうかと氣がかりになつてゐた。

かういつたやうな思案は、祕密結社員のやうに三度ノックする音がだしぬけに聞こえて來たの

で途ぎれてしまつた。

「だれ？」と、葬儀屋は訊ねた。ドアが開いて、一目みて獨逸人の職人と知れる男が部屋へ入つて來て、愉しさうな樣子をしながら葬儀屋のところへ歩み寄つた。

「御免下さい。お隣りの旦那、」と、今日でもわれわれが苦笑せずには聞かれないやうな露西亞の訛り言葉で彼はいふのであつた、「お邪魔しまして濟んませんです……わたくしは一日も早くお近づきになりたいと存じて居りました。わたくしは靴屋でして、名はゴットリーブ・シュルツと申し、この通りの向かうの、ちやうど御宅の窓と向き合つたあの小つぼけな家に住んどる者です。明日は銀婚式を擧げようと思ひまして、貴方と貴方のお嬢さん方に一つ、仲間なみに食事をつき合つていただきたいんでござんして。」

この招待は快よく承諾された。葬儀屋は靴屋にむかつて、まづ腰をかけて、お茶を一杯めしあがれと勸めたが、やがてゴットリーブ・シュルツが、ざつくばらんの性質をもつてゐたおかげで、直きに二人は友達らしく話し合つてゐた。

「御商賣はいかがです？」と、アドリアンが訊いた。

「えへへへ——」と、シュルツが答へた、「まあ、どうにか、かうにか、別に苦情をいふことはありません。無論そりや私のうちの品物はお宅のとは譯がちがひますがね。何しろ生きてゐる者は靴がなくつたつて居られますが、死人と來た日にや、棺桶がなくちや、どうにも仕やうがありませんからの。」

「大きに、御尤もで、」と、アドリアンがいつた、「しかし、生きてる人間が一文なしで靴が買へないからといつて腹を立てるがものはないでせう、跣足で歩けばいいんですもの。ところが乞食の死んだのとなると、ろはで棺桶を卷き上げるんですからね。」

こんな風にして、二人の會話はなほ暫らくつづいたが、たうとう靴屋は立ちあがつて、あらためて招待の言葉を述べながら、葬儀屋に別れを告げた。

翌くる日は、かつきり十二時に葬儀屋とその娘たちは新しく買つた家の耳門を出て、隣りの家へと出かけて行つた。

私はこの際、今日このごろの小說家が習慣にしてゐるやうにアドリアンの露西亞風のカフタンがどうだとか、アクリーナとダーリヤの猶太風の衣裳がどうだとか、さういつたやうなことを描寫することは差し控へて置かう。それにしても、娘が二人とも黃いろい帽子と眞赤な革沓をはいてゐたといふことを述べるのは餘計なことではあるまいと思ふ。こんなものは、實は莊嚴な場合

にかぎつて身につけるものなのである。

靴屋の狭い家はお客で一ぱいであつた。その大部分は妻君をつれて來てゐる獨逸人の職人であつた。露西亞人の官吏では派出所詰の巡査でユールコといふのがただひとり來てゐたが、この男は芬闘人で、至つて身分は低かつたのにもかかはらず、主人からの特別の御贔屓にあづかつてゐた。彼は二十五年の間、ポゴリエルスキイの小説に出てくる郵便配達のやうに、信念と誠意とを以て、この務めに携はつて來た。十二年の大火は首都を灰燼に歸し、彼の黄いろい派出所をも燃やしてしまつた。しかし、敵軍が驅逐されるや、直ちにドーリヤ式の白い圓柱のある灰色の新しい派出所が、おなじ場所に建てられて、ユールコは又しても斧を持ち、粗製の羅紗の胸當をあてて、そのあたりをぶらつくやうになつた。彼はニキートスカヤ門のそばに住んでゐる獨逸人の大ていの者と相識の間柄で、この連中のなかには日曜から月曜にかけて、ユールコのところに一夜の宿をかりる者さへもあつた。

アドリアンはすぐに彼と知合ひになつたが、これは晩かれ早かれ、知つておく必要がある人物だと考へたからであつた。

そこで、お客たちが食卓につく時も、二人は並んで席についた。シュルッ氏夫妻と、十七にな

るロオトヒエンといふ娘は、お客と食事を共にしながら、お客の接待をしたり、料理女にお給仕の手傳ひをしてやつたりした。ビールがあふれるほどにつがれる。ユールコは四人前を食べたが、アドリアンもそれに引けはとらなかつた。彼の娘たちは妙に遠慮してゐた。獨逸語の會話は一刻ごとに騒々しくなつて來た。俄かに主人は一同の注意を促し、タールをもつて目張りをした酒壜の栓を抜きながら、聲高らかに「わが善良なるルイーザの健康を祝す！」といつた、下等のシャンパンが泡立ちはじめた。主人は四十女の、妻の活々した顔にやさしく接吻し、お客たちは騒がしくルイーザの健康を祝して乾杯した。親愛なるお客様方の健康を祝して乾杯した。

「親愛なるお客様方の健康を祝して！」と、主人は二本目の栓をあけながら言ひ放つた。

お客たちは再び乾杯しながら、主人に禮を述べた。かうして乾杯に乾杯が重ねられて行つた。めいめいに一人々々の客の健康を祝つて飲み、モスクワを祝ひ、さては十二の獨逸の小さな町を祝つて飲んだ。更に凡ゆる同業組合を一まとめにし、或ひはめいめいに祝つて飲んだ。また親方や職工頭の健康を祝つて飲んだ。アドリアンは熱中して飲んでゐたが、やがてひどく陽氣になつたので、何か戯談の祝杯を擧げようと自ら進んで提議した。不意にお客の一人である肥つちよの

屋

儀

葬

麵麭屋が杯を擧げて叫んだ。

「われわれに仕事さして下さる方々　Unsere Kundleute（われわれのお得意様方）の健康を祝して！」

この申し出はほかの凡ゆる申出と同様に、喜んで異議なく受け容れられた。お客たちは、互ひに挨拶を始めた、仕立屋は靴屋に、靴屋は仕立屋に、麵麭屋は仕立屋と靴屋の二人に、來客一同は麵麭屋にといつたやうに、それからそれへと挨拶をした。かうして互ひに挨拶を交はしてゐる最中に、ユールコは隣りにゐる人にむかつて、かう叫んだ。

「さあ、どうだね？　あんた、あんたも亡者の健康を祝して飲みたまへよ。」

一同は大聲に笑ひ出した、が、葬儀屋は自分が侮辱されたと思つて苦々しい顔をした。誰もがそれには氣がつかなかつた。客は飲みつづけてゐた。さうして一同が食卓を離れた時には、もう夕べの祈りの鐘が鳴つてしまつてゐた。

客は夜ふけてちりぢりになつた、大ていの者は上機嫌であつた。肥つちよの麵麭屋と、赤いモロッコ皮で裝幀したやうな顔をしてゐる製本屋とはユールコの手をとつて、派出所へ連れ歸つたが、これはこの好い機會に「世の中はもちつ、もたれつ。」といふ露西亞の諺を遵奉したのであつた。

葬儀屋は醉つぱらつて、憤然として家に歸つた。

「一體全體、どうしたといふんだ？」と、彼は聲を立てて、考へて見た、「何だつて儂の商賣が外の奴等のより値打がないんだ？　葬儀屋が死刑執行人の兄弟分だとでもいふのか？　異教徒めが何を笑ふんだ？　葬儀屋がクリスマスの道化師だとでもいふのか？　儂はこの新しい家へ、あいつ等を招んで、しこたま御馳走をしてやらうと思つてゐたんだが、そんなことは眞つ平御免だ！　あんな奴等を招ぶよりも、儂に仕事をさしてくれる正教徒の亡者たちを招ぶことにしよう。」

「何でございますね、旦那様？」と、丁度この時、靴をぬがしてゐた女がいつた、「何で、そんな馬鹿なことをおつしやるんです？　十字をお切りなさいまし！　死人を新しい家へ招ぶなんて！　まあ、とんでもない！」

「ほんたうに招ぶんだぞ」と、アドリアンは言葉をついだ、「しかも明日にしよう。どうぞはや、儂の恩人たちよ、明日の晩は儂のところで一杯きこし召して下され。何も格別の御馳走もございませぬが。」

かういつて、葬儀屋は寢床についたが、間もなく鼾をかきはじめた。

アドリアンが起こされた時には、おもてはまだ暗かつた。女の商人トリユーヒナはその晩のう

ちに亡くなつたので、この知らせをもつて、番頭のところからアドリアンの許へ飛脚が馬に乘つて、あたふたとやつて來た。葬儀屋は使の者に酒手として十哥の銀貨をやり、大いそぎに身支度をして、辻馬車をやとひ、ラズグリヤイをさして出かけて行つた。故人の家の門口にはすでに警察官が立つてゐて、商人たちが死骸を嗅ぎつけた大鴉のやうに行つたり來たりしてゐた。死人は卓子のうへに、蠟のやうに黃いろくなつて横たはつてゐたが、まだ腐敗のために形ちが崩れてはゐなかつた。その周圍には親身のものや隣りの人たちや內輪の者が込み合つてゐた。窓といふ窓は開け放されて、蠟燭が燃えてゐた。僧侶が祈禱の詞を誦んでゐた。アドリアンはトリユーヒナの甥の粹なフロックを着た若い商人に近づいて柩や蠟燭や覆ひや、そのほか葬儀に必要な品々はすぐに全部きちんと取り揃へて納めるといつた。相續人は値段の掛引きはしない。こちらは一切、君の良心に信賴してゐると言つて、ぽんやりとお禮を述べた。葬儀屋は、いつもの例に從つて、餘計なお金は戴かないと誓ひ、番頭と仔細ありげな眼を交はして、いよいよ準備にとりかかるためにその場を出て行つた。

その日一日、彼はラズグリヤイとニキートスカヤ門との間を往つたり來たりして、日の暮れぎはに一切が整ふと、辻馬車を歸して、歩いて家に歸つた。

月のある夜であつた。葬儀屋はニキートスカヤ門に恙なく辿り着いた。

昇天寺のところへ來ると、例のお馴染みのユールコが呼びとめたが、こちらが葬儀屋であることがわかると、「今晩は、」といつた。

夜は更けてゐた。葬儀屋はもう自分の家のそばまで來た、すると不意に誰かが門に近づいて、耳門をあけて、中にかくれたかのやうに思はれた。

「一體、何だといふんだ？」と、アドリアンは考へた、「今さら儂に用があるのは誰だらう？泥棒が盜みに來たんぢやないかな？　うちの馬鹿娘んところへ來た色男ぢやないか知ら？　どうも氣味が悪い！」

葬儀屋は、すんでのことで友達のユールコの助けを呼ばうかと考へてゐた。この時また誰かが耳門に近づいて中へ入らうしたが、急ぎ足の主人を見ると、立ちどまつて三角の帽子をぬいだ。その顏はアドリアンには見覺えがあるやうに思はれたが、慌ててゐたので、はつきりそれとは見きはめがつかなかつた。

「よくいらつしやいました」と、アドリアンは息を切らしながら言つた、「どうぞお入り下さい、さ、どうぞ。」

「いや、おかまひなく、あんた、」と、その人は聲低く答へて、「先へ入つてお客樣を案内しておくれ。」

アドリアンには先をゆづつて居る餘裕もなかつた。耳門は開いてゐて、彼は階段を昇りかけた、後にはその男がつづいて。

アドリアンは部屋から部屋へと、大勢の人が歩きまはつてゐるやうな氣がした。

「一體これあ、どうしたといふんだ！」と考へて、彼は急いで部屋へ入らうとした……すると、兩足がすくんでしまつた。部屋は死人で一ぱいであつた。窓からさし込む月かげは、彼等の黄いろい顔、蒼い顔、窪んだ口や、どんより曇つて半ば瞑ぢられてゐる眼や、突き出してゐる鼻を照らしてゐた……。アドリアンは恐怖に慄へながらも、これらの人たちは自分が世話をして葬つてやつた人たちであり、また彼と一しよに入つて來たお客は、あの豪雨の折に葬られた旅團長であることを認めることが能きた。彼等は悉く男も女もお辭儀をしたり、挨拶したりしながら、葬儀屋を取り卷いた。ただ一人、ついこの頃、無料で葬式を出してもらつた貧しい男だけは、身につけたぼろぼろの襤衣をひどく恥ぢらひ、敢へて近づかうとはせずに、つつましやかに片隅に立つてゐた。ほかの者はみな禮儀にかなつた身なりをしてゐた、つまり、女の死人たちは頭巾とリボン

をつけ、官吏の死人たちは髯こそ剃つてはゐなかつたが、きちんとした制服を着、商人たちは美しい上衣を身にまとつてゐたのである。

「どうだいブローホロフ、」と旅團長は名譽ある一座の者を代表していつた、「われわれはみな、君の招待に應じて浮びあがつて來たものだが、浮びあがる力のない者や、全く身體がばらばらになつて、皮がなくなり、骨ばかりになつてしまつた者はやむを得ずあとに殘つてゐる。尤もただ一人、ひどく君のところへ來たがつて、どうしてもぢつと我慢してられない者があつたよ。」

この刹那に、小さい骸骨がむらがる亡者たちの間を押しわけて、アドリアンのところへ近づいて來た。髑髏は愛想よく葬儀屋に微笑みかけた。薄みどりや赤の羅紗のきれはしと、古ぼけた麻布のぼろきれが細長い竿のやうな身のあちこちにぶらさがり、足の骨は膝まである長靴のなかで臼のなかの杵のやうにきしめいてゐた。

「お前は俺がわからなかつたな、ブローホロフ、」と、骸骨は言つた、「お前は退職の近衛軍曹ピョートル・ペトローキッチ・クリールキンを覺えてゐるかな？　あの千七百九十九年にお前が最初の棺桶を賣つた相手だ、しかも槲のをくれといつたのに松のやつを賣りつけやがつて。」

かう言ひながら、その亡者は骨ばかりの腕をさしのべた。が、アドリアンは勇を鼓して叫ぶと

共に亡者を突きとばした。ピョートル・ペトローキッチはよろめいて倒れたので、すつかり粉々に碎けてしまつた。亡者たちの間には憤怒の呟きが起つた。いづれも自分の同僚の名譽のために立つて、口々に罵つたり、脅かしたりしながらアドリアンに詰め寄つた。その叫びごゑに耳も聞こえなくなり、殆んど壓し殺されたやうになつた哀れな主人は、すつかり落ち着きを失つて、自ら退職近衛軍曹のうへに倒れて正氣を失つてしまつた。

かなり前から太陽は葬儀屋のやすんでゐる寢臺を照らしてゐた。やがて遂に眼をあけると、自分の前にサモワルの火を吹いてゐる女が眼に入つた。恐怖の念をいだきながらアドリアンは昨日の出來事の一部四什を思ひ出した。トリューヒナと旅團長とクリールキン軍曹とが、ぼんやりと胸に浮んで來た。彼は女に話しかけ、昨夜の事件の結末を女が注進するのを默つて待つてゐた。

「アドリアン・プローホロキッチ樣、」と、アクシーニヤは彼に寬服を渡しながら言つた、「お隣りの仕立屋さんが參りましたよ、それから此處のおまはりさんが今日は自分の『プライヴエート』な命名日だといつて知らせに寄りましたよ、けど、あんまりよくおやすみだつたので、お起こしする氣にはなれませんでした。」

「亡くなつたトリューヒナんところから誰か來たかえ？」

「亡くなりましたつて？　あの方が死んだんでございますか？」

「何ていふ馬鹿だ！　お前は昨日、あれの葬式の用意をするのに手傳つたぢやないか？」

「何でございますね、旦那樣、お氣がちがつたんぢやございませんか、それとも昨日の醉ひがまだ醒めないんでございませうか？　昨日、どこにお葬ひなんかございましたの？　一日中、獨逸人のところで御酒を召しあがつて、醉つてお歸りになつて、床の中へころげこむと、もうそれなりに今の今までおやすみになつたんでございますよ、彌撒の鐘がもう鳴つてしまひましたのに。」

「ほんたうかえー」と、葬儀屋は大喜びで言つた。

「ほんたうでございますとも、」と、女は答へた。

「うん、そんなら早くお茶をくれ、そして娘たちを呼んでくれ。」

一八三〇年九月九日

ボルディノにて

解題

『スペェドの女王』

一八三三年の秋に書かれて、翌年の三月、或る雜誌にPといふ署名で發表された。日記によれば、老伯爵夫人の原型となつたものは、當時のペテルブルグの上流社會に知られたエヌ・ペ・ゴリツィナ（一七四一――一八三七）であつたといふ。

この作品は、短篇作家としてプウシキンの凡ゆる才能を窺ひ知るに足るものであつて、若き工兵士官の怖るべき欲望と情思との悲劇を描いて、鬼氣迫るがごときロマンチシズムの極致をあらはしてゐる。後年、ドストイエフスキイはこの主人公に暗示せられて、大作「罪と罰」の主人公ラスコォリニコフの性格を發展せしむるに至つたと傳へられる。

『ピョートル大帝の黑奴』

プウシキンがこの作品を書いたのは、一八二七年であつた。親友ヴーリフはその日記のなか

で、次のやうに記してゐる。

「昨日はプウシキンのところで食事をした。書いたばかりの散文小説の最初の二章を見せられたが、それにはアビシニヤの小王の子で、トルコ人に誘拐され、コンスタンチノープルに來て、ロシア公使からピョートル大帝に献ぜられ、大帝に育てられて、いたく寵愛されてゐた彼の祖父ハンニバルが主要人物となつてゐる。この小説のやまは、プウシキンの話によると、黒奴の妻が白人の子を産み、そのために修道院へ送られるといふことにある由」。

ヴーリフが記したのは九月の十六日で、その時はまだ完成してゐなかつたのである。それどころか、この散文作はつひに完成されずにしまつて、題さへもつけられなかつた。題がつけられたのは、彼の死後、雜誌『現代人』に掲載される際、編集者によつてであつた。完成されなかつた、しかし、この未完の小説は、彼自身の創作の道においても、ロシア小説の歴史においても、明らかに一つの紀元をなすものであつた。

先づ私たちは、この小説が、他の散文形式による彼の作品と同樣、歴史的な性質をもつことを認めなければならぬ。

プウシキンが歴史に多大の關心を寄せてゐたのは少年時代からであつて、學習院を卒業した頃

には、その時分に世に出たばかりのカラムジンの『「ロシア國史」』を愛讀してやまなかつた。更にキシニョフにあつては、閑暇のある生活のうちに、夥しい歴史書類を耽讀した。ミハイロフスコエの幽居の間に記された書類のうちには、中世史やローマの史家タキトウスについての覺書などが散見されるのであるが、それにもまして彼の興味をひいてゐたものは、やはりロシアの歴史であつた。それと共に、十八世紀のロシア生活に材をとつて、歴史小説を書かうとする意慾がたえず彼の腦裡を離れなかつた。かくして、最初の散文作として、この作品に手を着けたのであつた。

この小説の主人公は彼自身の曾祖父にあたるイブラヒム・ハンニバルであつた。そこに人として、皇帝としてのピョートルを配し、同時にピョートル時代の貴族の生活や感情、ピョートルによつて建設されて行く新しい社會の姿、乃至は當時の夜會を描いて、新時代と舊時代の代表者のタイプを示さうとした。

プウシキンはこの小説を書くにあたつて、必ずしも事實にのみ據つた譯ではなかつた。彼自身の書いた『プウシキン家およびハンニバル家系譜』なる一文のうちには、アビシニヤ（エチオピヤ）の小王の子としてうまれた曾祖父のことが述べられ、「私の曾祖父ハンニバルは、家庭生活

においては父方の曾父プウシキンと同様不仕合せな人であつた。最初の妻はギリシャ生れの美人であつたが、白い娘を産んだ。ために彼は離婚して、妻を修道院に入るの餘儀なきに至らしめた」と記されてゐる。即ち、親友ヴーリフに語つた小説のやまであつた。しかし、この女性のことはかなりに詳しく分つてゐるにも拘らず、「白い娘を産み」については今なほ何らの確證があげられてゐない。

ところで、この作品では、「白い娘を産み」云々とは反對に、イブラヒムが白人と姦通して、黑い子を産ませたことになつてゐる。更に、イブラヒムの事實上の結婚は、ピョートルの崩御して後のことであり、また彼の妻は貴族の娘ではなく、彼が『系譜』の中で記してゐるやうに、ギリシャうまれの娘であつた。この結婚は一七三一年のことで、翌年には早くも離緣し、間もなくロシア人と結婚したのであるが、この第二の結婚は宗教上の掟によつて永く認められず、正式に承認されたのは同棲してのち十五年を經てからであつた。

かやうに、事實に即しない部分があるにしても、これは作者の藝術的虛構といふべきものであつて、何らの問題を提供するものではない。

この作品は、散文の制約に從ひながら、あくまでレアリスティックな描寫に終始しえた最初の

ロシア小説の一つであつて、散文作家プウシキンの道はここに決定されたといつても過言ではないのである。

『葬儀屋』

一八三〇年の秋、プウシキンは一切のセンチメンタル的なものを排して、極めて冷靜に同時に寫實的に、普通人の生活を描寫することを目的として一聯の物語を書いたが、其の中でも「葬儀屋」と「驛長」の二篇が最も成功したものであることは批評家のアポロン・グリゴリエフが指摘してゐるところである。

就中、「葬儀屋」に於てはファンタスチカルな題材が寫實的な筆致を以て頗る巧妙に描寫されてゐる。

發行者寄贈

昭和二十四年九月十日印刷
昭和二十四年九月十五日發行

春陽堂文庫
「スペードの女王」
（定價 六十五圓）

1014

飜譯者　中山省三郎
發行者　東京都中央區日本橋通三丁目八番地　和田利彦
印刷者　東京都港區芝愛宕町二ノ八五番地　青山與三次郎
印刷所　東京都港區芝愛宕町二ノ八五番地　青山印刷株式會社

發行所　東京都中央區日本橋通三丁目八番地　株式會社　春陽堂
電話日本橋五一・四八四八
振替東京一六一七番

本製村木

落